

創基 200 周年

山口大学の 来た道 2

目次

- 1 激流に挑む防長教育
- 7 官立山口高等中学校
- 23 県内初の高校誕生
- 33 教える道の発祥
- 37 農業教育の芽生え
- 41 年表

山口中学校

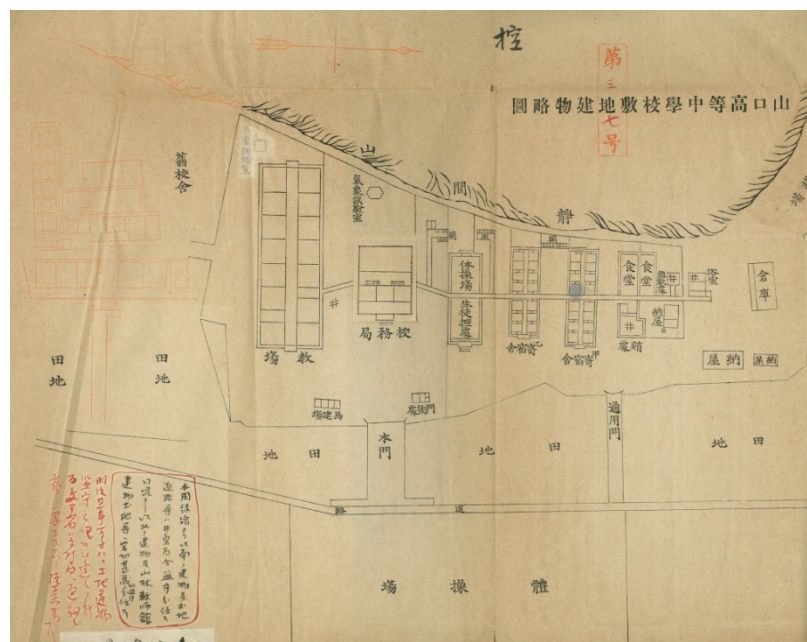
から

県内初の 高校創立へ

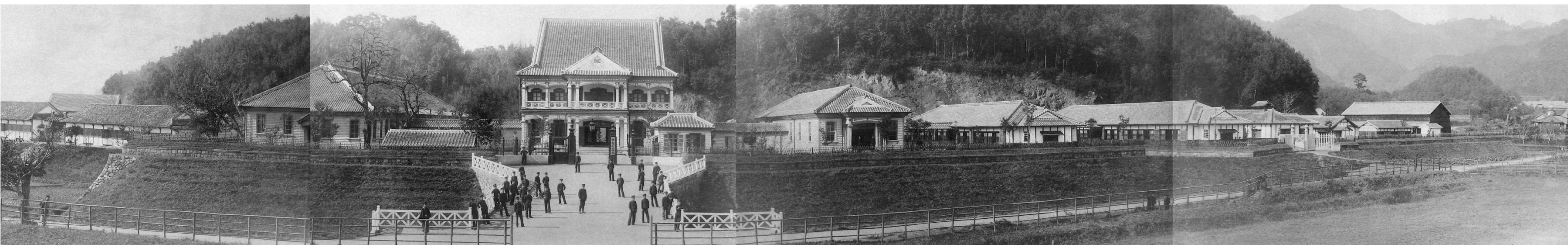
明治という新しい時代の訪れとともに、国の政策も大きく変わっていった。
明治5年には、わが国で最初の近代学校教育制度に関する法令「学制」が公布され、全ての国民に教育を行うという国の方針が示された。

山口県では、郷土の教育を復興せんと、毛利元徳を中心に防長教育会が創設され、これを基盤として県の教育界は発展していく。
防長教育会やそれに関わる者たちの熱意は、やがて山口県独自の進学体系の確立へとつながった。

転変する時代の中で、山口県の教育は徐々にその形をあらわしつつあった。



山口高等中学校全景(明治20年頃)
左は校舎配置図



激流に挑む防長教育

幕藩体制から新政府へ

明治時代の幕開けは、人々の生活環境を一新するものであった。

人材育成に積極的に取り組み教育立国を呈していた山口も、政府から繰り出される政策を取り込みながら、試行錯誤を重ね独自の施策を模索・実施していく。

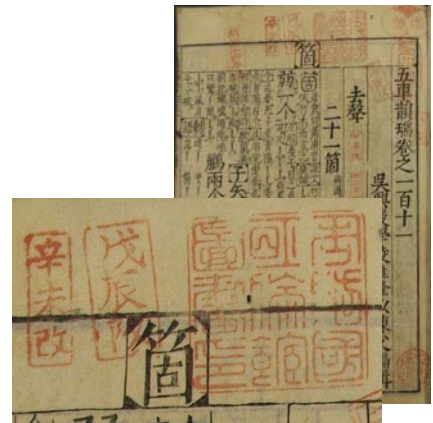
その姿からは、明治という新時代の激流に積極的に挑んでいった山口県教育の意気込みが感じられる。

明治3年 山口中学

明治3(1870)年、政府は「大学規則」「中小学規則」を発令。小学・中学・大学という三段階区分を初めて公示し、小学・中学を経て大学にいたる進学経路を明らかにした。今まで存在しなかった進学という概念が制度として確立し、中学は大学への進学機関として位置づけられた。

これを受け山口藩は大学への予備学校として小学・中学を設ける。諸郡の郷校を小学とし、山口明倫館・萩明倫館をそれぞれ山口中学・萩中学と改称し中学とした。

明治4年、廃藩置県により、旧4藩(山口・豊浦・清末・岩国)は合併し「山口県」となる。県に変わっても学科内容の根本的改革までは行われなかったが、藩校を中学とした意義は大きかった。これ以降山口県では他府県とは異なる進学体系を築いていくこととなる。



山口中学の蔵書

改印(辛未改:明治4年のこと)から前校の山口明倫館の書物をそのまま引き継ぎ使用したことがわかる

「学制」の公布 一家に不学の人無からしめん



明治5年8月3日、日本で最初の近代学校制度に関する基本法令である「学制」が公布される。その狙いは女子を含めた国民皆学であり、そのために小学校の義務教育の確立を目指すものであった。これにより全国に学校が設けられ、近代学校が成立発展していくこととなる。

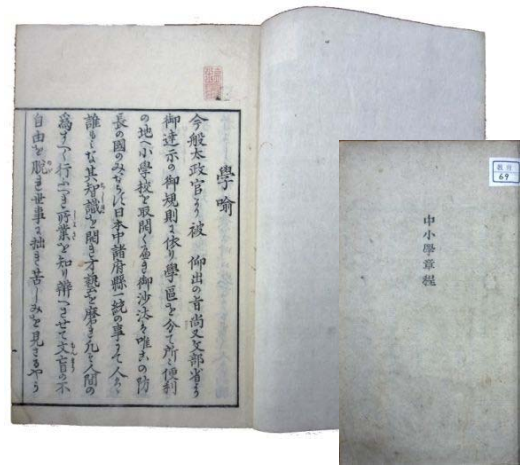
学制序文

学制が公布された際、政府の教育方針を広く国民に知らせるため太政官から発せられたもの

明治5年 山口変則中学

学制の公布にともない、県は明治5(1872)年、「学諭」^{がくゆ}「中小学章程」を制定し積極的に対応。県の庶務課に学務掛(後の学務課)を設置し、山口中学を含む県下の学校を廃止し、新たに学区を設け管理を行った。しかしながら、この学区に設置された中学は、施設・設備・書籍などが不備であったため、変則中学として発足し徐々に制度に適應しようとした。

国が初等教育に重点を置いたため国費の援助はなく、変則中学の経営は当初から困難な状況にあった。また、旧制の学科・教則によって教育された生徒の取り扱いも課題となっていた。



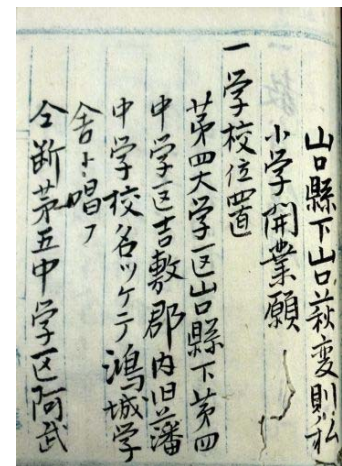
「学諭」、「中小学章程」
(山口県文書館所蔵)

明治6年 山口変則小学

県は経営困難であった変則中学を廃止し、明治6年4月、変則小学(通称:鴻城学舎^{こうじょうがくしゃ})を設立する。教育水準を下げ旧学科を修めたものにも適應できるようにしながら、小学校とは違う教育を施し、県民に対し幅広く教育の機会を与えることを目的とした。しかし、依然として経済的基盤が弱く、維持が困難なため、翌年8月には閉鎖された。

また、この頃各地で相次いで起こった土族の反乱の影響も、小学閉鎖の原因の一つとされている。山口県では前原一誠を中心として萩の乱が起こるが、これらの反乱は学舎を拠点とすることが多かった。

この変則小学の閉鎖により、山口県の中等教育は一時中断することとなった。



山口県下山口萩変則私小学開業願
(山口県文書館所蔵)
変則小学の設立を文部省に提出



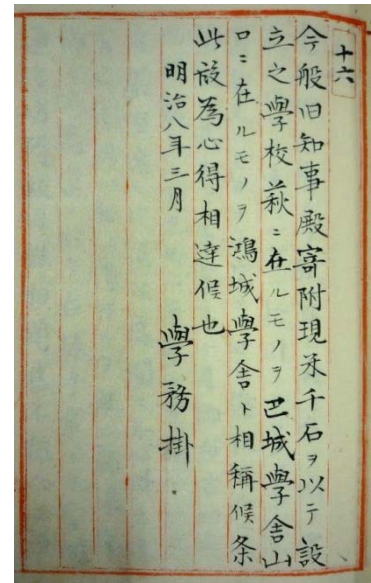
山口県下賊徒追討図 (山口県博物館所蔵)
萩の乱を政府軍が鎮圧する様子を描いたもの

県独自の教育機関の設立

明治8年 鴻城学舎 (山口上等小学校)

生活の手段を持たない士族の経済的貧窮は深刻であった。これを憂慮した県令中野吾一は木戸孝允・井上馨らに対策を要請。明治7(1874)年11月、士族の授産を目的とする授産局と農商工民の勸業を行う防長共同会社を設立し、士族の授産事業と教育事業の取組みをスタートさせた。

授産局は教育授産として鴻城学舎^{はじょうがくしゃ}と巴城学舎の再建に着手し、同年12月、開設の準備を整え、翌年1月再興する。小学卒業生を入学対象とし、教育内容は従来通りのものとした。これらは授産局の事業として進められたため県が運営していたが、資金の大部分が毛利家の寄付であったため同年4月、これを毛利家の私立経営に改めた。



巴城学舎・鴻城学舎設置の達
(山口県文書館所蔵)

明治11年 私立山口中学校

これまで変則小学や上等小学校など変則の形態を続けてきたが、新制度の小学卒業生が増加し、正規の中等教育の再興が必要とされるようになった。そこで上等小学校を改めて山口中学校としたが、依然として毛利家経営のため「私立」と称した。入学資格は満14歳以上のものと定められ、尋常中学科、高等中学科(合わせて5年間修学)がおかれた。これが次の県立中学校の基礎となる。

明治13年 県立山口中学校



山口県教育界は試行錯誤しながら政策を行ってきたが、高等教育機関への道は確立されず、山口県から有能な人材を中央に送り出したいという願いはかなわない状況であった。これは多くの人々に憂慮されることとなり、県立の中等教育振興の運動が起こっていく。

県は旧藩家や在京の県出身者、そのほか県内の有志に寄附を依頼して資金を募った。これを基金として明治13年6月、県下を山口、萩、豊浦、岩国、徳山の5つに分け、それぞれ県立の中学校を設けた。県立五中学体制の発足である。

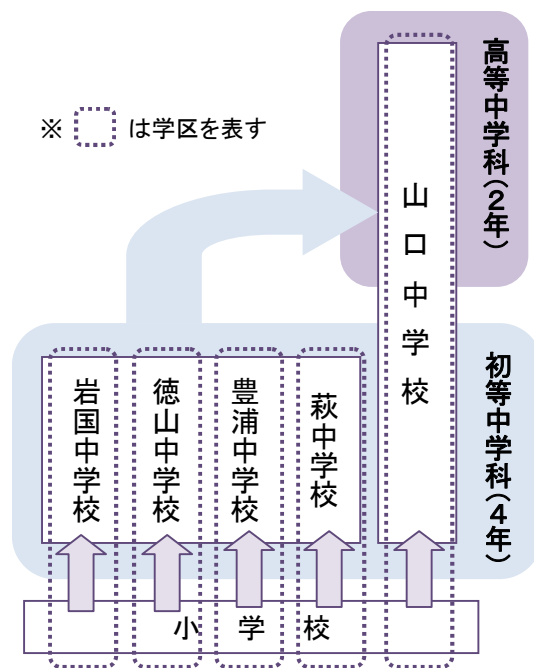


正門にて記念写真
(明治18年頃)

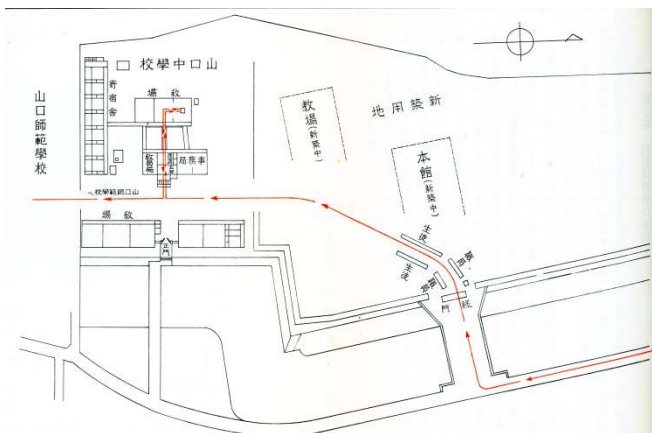
県立五中学のうち、山口中学校には修業年限5年で尋常中学科と高等中学科を設けたが、他の4中学校は、尋常中学科のみであった。したがって進学を希望するものは山口中学校の高等中学科へ進むこととなった。

明治16(1883)年、文部省が制定した中学校教則大綱に準拠して「山口県中学校諸規則」を定め、尋常中学科を初等中学科と改称し、修業年限を1年延長して4年とした。翌年には山口中学校と他4校は、本・分校の関係になり、山口本校が4分校を統括し、初等中学科の卒業生を本校の山口中学校に編入させる形をとった。ここに、山口県独自の中学校体系が成立した。

しかし依然として経営困難な状況は変わらず、県立中学校の経営と維持を図る目的として防長教育会が創立された。

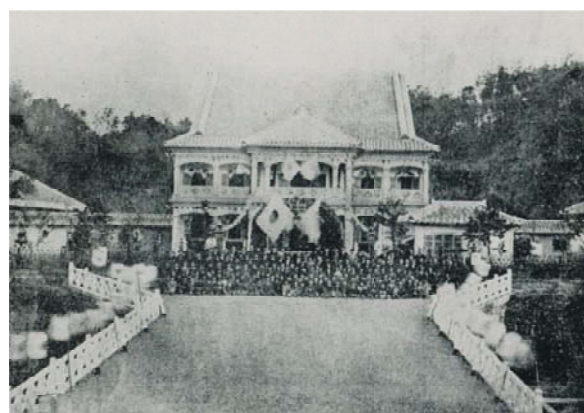


明治17年頃の学校系統図



当時の県立山口中学校校舎配置図

明治18年7月、明治天皇が山口中学校と山口師範学校を視察された時のもの



新校舎落成式 (現:山口県立美術館入口付近)

明治19年6月完成。防長教育会成立後、県下中学校教育振興事業の第一歩として校舎の改築が行われた

これ以降、明治19年の中学校令による官立高等中学校の設立にともない、五中学は山口高等中学校予備門として位置づけられ、中等教育は大学への進学過程の一部として組み込まれていった。

防長教育会—県教育のバックボーン—

創設と基金

防長教育会創設の発端は、明治17(1884)年に外務卿井上馨が帰郷した際、長州藩最後の藩主毛利元徳からの依頼によって県下の学事視察を行ったことに始まる。井上は、五中学の体制不備や運営資金不足、士族の窮乏等を痛感し、その報告を受けた元徳は「防長教育会」の設立を決意した。創設趣意書では、以下のとおり述べている。

「小学校教育レベルでは全国でも中位にある。しかし、中学校はその規模、学則、教員、生徒数など寂しい限りである。私としては故国山口県の学事をこのような状況に放置することは忍びない」

防長教育会の創設にあたり、創設基金として毛利本家が10万円を寄付したのを皮切りに、長府、徳山、清末各家及び岩国吉川家が寄付、更には政官界、実業界、県内各地の有志多数が賛同し、募金活動は県の総力をあげて行われた。

明治18年末には資金総額は304,915円余となり、明治20年末には、山口県の地方税収入(384,554円)に匹敵する380,499円余という巨額に達し、明治22年頃には50万円(現在の金額に換算すると50億円超!?)にも達していた。国内が窮乏している中、民間が中心となり教育基金にこれだけ捻出したことは驚愕といえる。また、このような潤沢な資金があったからこそ、山口県は独自の進学システムを形成することができたのである。

学校経営

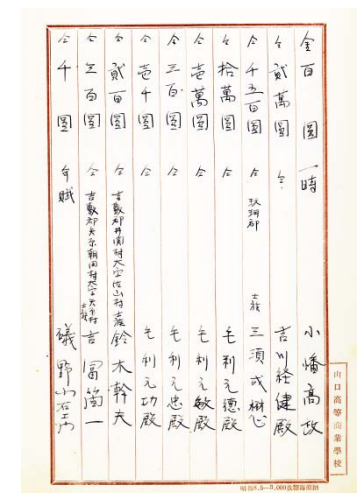
防長教育会は、まず五中学の整備と充実に着手した。五中学は県立のため、運営資金は地方税から援助が決まったものの、当時、国内不況にあえいでいたこともあり、その支出にも反対の声が上がっていた。

明治19年の中学校令によって、一府県一中学校に数が制限されたことなどから、山口県としても中学校の整備充実のため新たに校地を購入したが、校舎を改築する資金はなく、それを肩代わりしたのが防長教育会の初仕事だった。

最大の事業は、明治19年の官立山口高等中学校設立から明治38年に終わる官立山口高等学校までの約20年間にわたる学校経営参画である。



毛利元徳
〔『防長教育会百年史』より〕



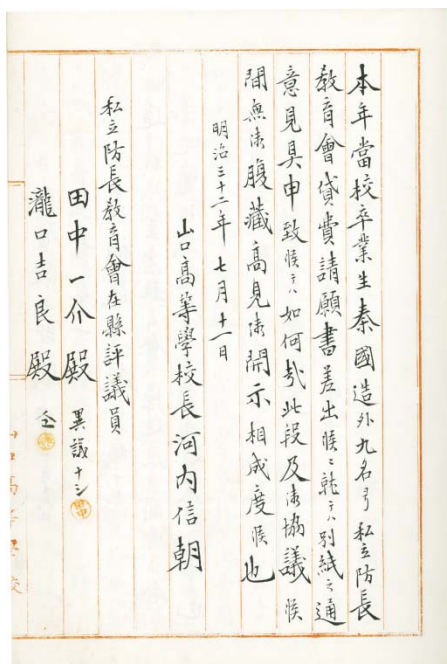
出資者の一覧(抜粋)
〔「私立防長教育会資本出金名録」より〕

山口高等中学校設置申請にあたり、県知事は文部省に管理願及び管理要項を提出した。その中に、「防長教育会は年額一万九千円を寄付してその運営費に充てる」が、それでも足りなかった場合として、「不足を生じた場合は文部大臣が山口県知事に通知して補充の計画を立てさせる」とある。これは責任の所在を求めたものであるが、実際には防長教育会が超過分も含めすべてを負担する約定であった。

こうして防長教育会は運営費を全額負担し、それは明治27年の山口高等学校改称後も継続したが、明治30年頃からの入学者急増と物価高騰により、経常費が次第に増加したため明治33年には国庫の補助を受けるようになった。これと引き換えに、管理権限のほとんどを失った防長教育会は学校運営から次第に身を引くようになり、明治38年に高等学校の建物全てを国に寄付した。

	歳 入 (単位:円)					歳 出 (単位:円)		
	防長教育会 寄付金	諸収入	前年度 繰越	政府 支出金	合 計	経常部	臨時部	合 計
明治 20	17,094	405	0	0	17,499	12,058	2,639	14,697
同 25	22,584	1,559	3,085	0	27,228	21,643	585	22,228
同 30	19,765	2,932	2,907	0	25,604	23,096	480	23,576
同 32	32,618	3,568	27	0	36,213	31,813	3,815	35,628
同 33	25,000	7,332	585	8,909	41,826	37,829	3,083	40,912
同 35	25,000	10,231	2,494	14,169	51,894	44,727	1,691	46,418

年度別歳入歳出対照防長教育会寄附金額表(『防長教育会百年史』より抜粋)



校長から在県評議員への依頼文

(『防長教育会貸費生に関する書類綴』より)

育英事業

防長教育会の活動におけるもう一つの柱は、学生に対する貸費留学制度である。会の設立から明治一大正一昭和を経て現在に至るまで、何と120年以上もの長きにわたり、山口県の子弟を大学に進学させるための支援を行ってきた。

制度創設当時の貸費額は一人当たり月額10円であり、その後若干改正されたが、京都帝国大学に進学した河上肇は月額8円を受給していた。この事業が最も輝いた時代は、設立から第二次大戦終結までの期間であるが、戦後の一時期を除いて現在もなお継続され、学資や宿舍等の支援を受けて大学あるいは大学院を卒業した学生の総数は2,000名を遥かに超えている。

官立山口高等中学校

官立山口高等中学校

県教育界の熱意実る！

明治19(1886)年、政府は中学校令により全国を5学区(東京・仙台・京都・金沢・熊本)に分け、学区毎に高等中学校を1校ずつ設置することとした。

山口県は近畿・中四国地方とともに第3学区の京都に属したが、県民のための高等教育機関を是非とも県内に設置したいとの思いが教育界には強かった。そこで県当局は防長教育会と協議の上、(1)県立山口

中学校の敷地、校舎、諸設備を新設する高等中学校に移す。(2)防長教育会は毎年1万九千円を寄付する。(3)管理要項を定め、新設する高等中学校は文部大臣の所管とする。ということで文部省に設立を請願し、認可された。

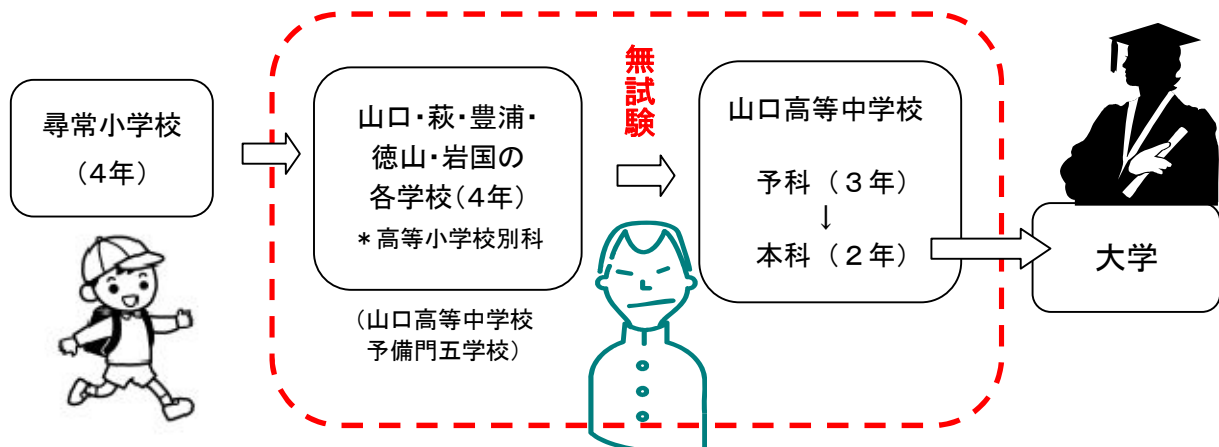
こうして明治19年11月、県立山口中学校は特例的に「諸学校通則」適用による官立山口高等中学校へと改称された。



山口高等中学校管理願

一貫した中等教育体系の実現

県立中学校時代に端を発した進学体系作りは、高等中学校の成立によって、ついに実現した。すなわち、小学校卒業から大学進学に至るまで9年一貫制の教育体系が整い、県内の青年子弟は高等中学校を終わるまで同一学制下に勉学する利便を得た。このことで、入学転校などによる時間と費用の損失を避けることができたことは大きな成果だった。



学科課程と学期

高等中学校本科の修業年限は2年だが、全国の制度と合わせるために、山口高等中学校では本科の下に予科3年を置いた。

本科には一部(法・文系)・二部(理・工系)の学科を設置し、生徒定員は本科80名(各部40名ずつ)、予科280名とした。

■学年は3学期制

第1学期 9/11～12/24(明治24年以降は 9/1～1/7)

第2学期 1/8～3/31(// 1/8～4/7)

第3学期 4/8～7/10(// 4/8～8/31)

■休業日

日曜日、秋季皇霊祭(秋分日)、^{かななめさい}神嘗祭(10/17)、
天長節(11/3)、^{にいなめさい}新嘗祭(11/23)、孝明天皇祭(1/30)、
紀元節(2/11)、春季皇霊祭(春分日)、神武天皇祭(4/3)、
夏季休業(7/11～9/10)、冬季休業(12/25～1/7)、
春季休業(4/1～4/7)

■授業料(年額)

本科10円、予科6円。これは他の官立高等中学校の半額にあたる。授業料を低廉に抑えたのは、いうまでもなく山口県民の子弟が修学し易くするためである。

<本科の学科目>

国語・漢文
第一外国語(英語)
第二外国語(独語か仏語)
ラテン語・地理・歴史・
数学・地質・鉱物・物理・
化学・天文・理財学・法学・
哲学・図画・力学・測量・
体操

* 明治24年6月、農科の増設に伴い、「動物及び植物」を追加。

当時の10円は、現代の15万円くらい。喫茶店のコーヒーが当時3銭だったとして、約300杯分になるよ。
今の山大生の年間授業料と比べると1/3以下だね。



訓育を重視した家塾的校風

設立時のスタッフは、河内信朝校長以下教官13名(雇外国人教師1名を含む)と事務関係5名だった。

師弟の関係は極めて親密で、昼食は職員も生徒も食堂に行き、食後は運動場で一緒に蹴球などに興じた。当時は学事草創期で、何事も建設開拓の時期だったこともあり、一丸となって新校風の発揚に邁進していた。



後河原の風景



亀山公園から運動場を望む

ハウスクネヒトの意見書

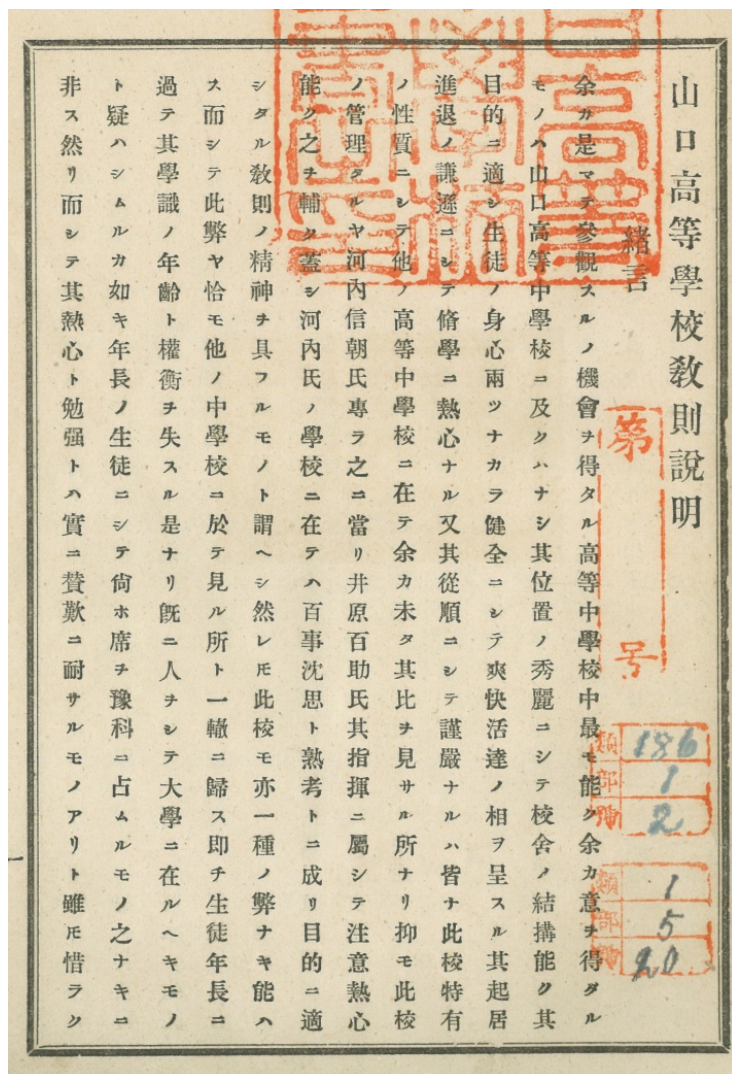
防長教育会が行ってきた山口高等中学校の教育制度を語る上で、欠かせない資料がある。

同会の役員であり、また山口高等中学校商議委員であった井上馨と品川弥次郎は、当時、帝国大学に雇われていたドイツ人エミール・ハウスクネヒトに対して、山口高等中学校の学事視察を依頼し、提言を求めた。

明治22(1889)年6月22日、山口を訪れたハウスクネヒトは、4日間かけて授業等を観察し、教則や組織などを調査した。後日、ハウスクネヒトがまとめた資料が「山口高等中学校教則説明書・同附録」と題する2冊の意見書である。



エミール・ハウスクネヒト



『山口高等学校教則説明書』

そもそも防長教育会は創立当初、県下の五中学の刷新を事業目的としており、その流れの中で、中学校令発布を受け、山口高等中学校を経営するに至った。そのために出来上がった独自の進学体系を、ハウスクネヒトは称賛。この意見書の中でドイツのギムナジウム(※)の制度に倣い、山口高等中学校と五中学校を総合的組織体として、その教授法を説明した。

その内容は、あたかも防長教育会の運営方針を理論付けるものであったため、防長教育会もこれを信認し多大の期待をかけた。

明治23年8月には、帝国大学でハウスクネヒトの教えをうけた谷本富たにもととめりを教授に任命し、その理論の実施に備えた。以降、防長教育会による山口高等中学校の経営は、従来の独自の進学体系の方針にギムナジウムの制度を取り入れたものとして発展していった。

※ギムナジウムとはドイツの大学入学準備のための9年制の中等学校のひとつ。

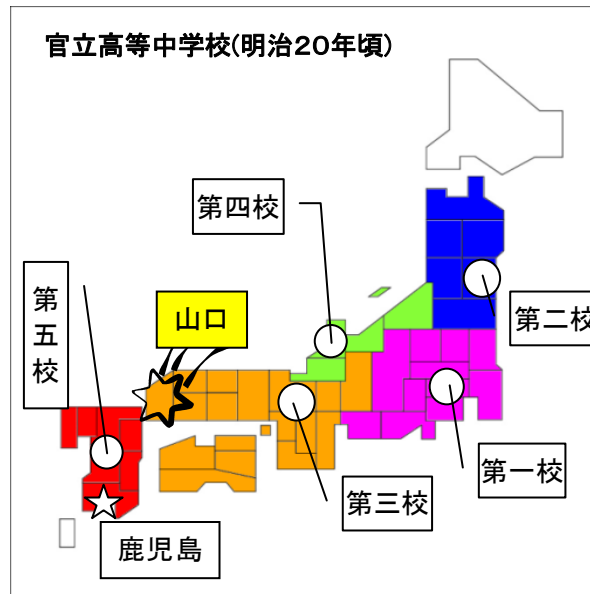
ナンバーズクールと山口高等中学校

一般的にナンバーズクールとは、設置順を示す数字を校名につけた学校のことを言う。これらの学校は文部省管轄の下、国庫負担で運営されていた。

明治19(1886)年の中学校令により全国を5つの学区に分け、1学区に1校の高等中学校が設置された。山口高等中学校は第一、第三に次ぐ全国3番目の中学校として設置されたが、ナンバーズクールにはならなかった。

結果として、第一から第五までのナンバーズクールと、それらと同等の扱いを受ける特例的な存在として山口高等中学校と

鹿児島高等中学造士館ぞうしかんが設置された。しかし、この2校の経営は後に破綻。鹿児島高等中学造士館は明治29年の廃校後に第七高等学校造士館となり、山口高等中学校は山口高等学校となるが明治38年に廃校になり、官立山口高等商業学校へと引き継がれた。



なぜナンバーズクールにならなかったのか

山口高等中学校がナンバーズクールにならなかったのは、学校所在地の移転が行われやすいことへの懸念や、校名から「山口」を消すことで防長教育会創設時の教育目標が色褪せるのではないかという憂慮から、山口県民のための高等機関でありたいという思いの強かった防長教育会が校名に「山口」を冠することに固執したためである。

一方の鹿児島高等中学造士館も同様に、全国的に配置された学校ではなく、薩摩藩の時代から藩校の中心であった造士館の伝統の上に作られた学校という思いを込め、「造士館」の称を留めることを希望したとされる。

このように、県下での教育に重きをおいていた2県は中学校令と同時に公布された諸学校通則に則り、山口では毛利家、鹿児島では島津家が主となり多額の寄付をしたことによって、5校の高等中学校以外の特例的な学校として設立されたのである。

諸学校通則明治十九年勅令第十六号

第一条 師範学校ヲ除クノ外各種ノ学校又ハ書籍館ヲ設置維持スルニ足ルヘキ金額ヲ寄附シ其管理ヲ文部大臣又ハ府知事県令ニ願出ルモノアルトキハ之ヲ許可シ官立又ハ府県立ト同一ニ之ヲ認ムルコトヲ得但寄附人ノ望ニ依リ其名ヲ附スルコトヲ得

第二条 寄附金ハ其寄附人ヨリ指定セシ目途ノ外ニ支消スルコトヲ得ス (以下省略)

優秀なる教師陣

かつて人材の淵叢^{えんそう}と称せられていた防長の凋落ぶりを深く憂いた在京の山口県出身者は、防長教育の復興を願い資金の収集や人選に奔走し、その行動はやがて明治17(1884)年の防長教育会の設立へと繋がった。

よって、校長をはじめとする山口高等中学校の教師陣の人選には、防長教育再興への強い思いが込められている。

こうちのぶとも

初代校長 河内信朝

県立山口中学校はしばらくの間、専任校長の不在が続いていた。在京の山口県出身者たちは熟議の末、東京で判事の職についていた河内信朝を推薦し、河内は明治16年8月、県立山口中学校長に任命された。

河内は萩に生まれ、萩、山口の両明倫館に学び、明治2年に上京。開成学校、大学南校に学んだ後、文部省などを経て、明治14年、判事に任じられ東京控訴裁判所に勤務していた。県立山口中学校の校長への就任は、この判事の職を捨て、教育会へ身を投じるものであった。

河内の着任は、ちょうど防長教育会の創立時期にあたっており、校務の傍らその事業にも深く関係し、教則の改正や、五中学制度の確立に尽力した。

学制改正により山口高等中学校が成立した後も、引き続き校長を務める。河内は防長二州に留まらず、広く天下の英才を教育して、これを中央の最高学府に送ること、またいずれ国を治め発展させるような人物を輩出するという希望と抱負を持っていた。その熱意と誠実な人柄のため、学生からの信頼も厚かったという。

明治26年の寄宿舎事件を機に、一時山口を去るが、山口の中等教育は河内を中心に発展したと言っても過言ではない。



山口高等中学校在職時の河内信朝

くまもとありたか

教頭・数学教師 隈本有尚

教師の多くは帝国大学の出身であった。当時は「防長俊才教育」が行われており、多くの授業が英語で行われた。学習専門の英語教科書はなく、原書が用いられたが、予備校4年間の語学力では到底ついていけず、予科を設けて補習をしているほどだった。

教頭を務めた隈本有尚は、富士山頂で日本初となる気象観測を行ったり、日本にはじめてマトリクス代数を紹介するなど極めて優秀な人物だった。

山口高等中学校赴任以前には、わずか25歳で福岡の名門・修猷館しゅうゆうかんの初代館長として迎えられている。東京大学予備門では、夏目漱石、正岡子規、秋山真之らに数学を教えていた。英語が巧みで、数学の授業も英語で行っており、英語が苦手であった正岡は隈本の数学の試験に落ち、予備門を卒業できなかったというエピソードもある。

また、隈本は正義感が強く、非常に厳格な人物であった。その厳格性からか自転車で街角を曲がるときも直角に曲がっていたとも伝えられている。授業も厳しく、当てた生徒に他の生徒が教えていると退室を命じた。生徒からは「教え方がまずい」と不満も出ており、彼の授業ぶりも寄宿舎事件の一因であったようだ。

ちなみに、隈本は夏目漱石の小説『坊っちゃん』に登場する一本気な先生「山嵐」のモデルとなった人物とも言われている。



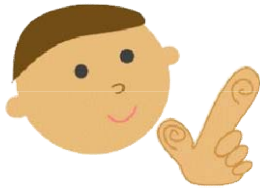
隈本有尚



山口高等中学校予科第1回卒業生と教師たち
(明治22年7月)

こぼれ話

あまりにも真面目過ぎた 隈本有尚の人生



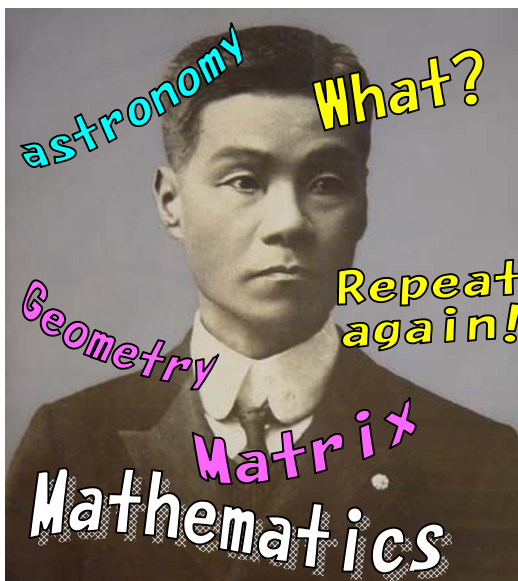
しつこいようだけど、硬骨漢ゆえの逸話があまりにも面白いので、隈本教頭に再度登場してもらいました。

<逸話その① 学生時代>

東京大学理学部の第一期生として入学し、星学(後の天文学)を専攻。物理・化学・数学に加えて英語までも堪能な、大変優秀な学生であったにもかかわらず、学士の称号をもらえなかった。なぜか？

それは、卒業式で「人物の真価^{あに}豈一枚の紙を以て定むるを得んや」と言って、卒業証書を理学部長菊池大麓(後の東大総長、文部大臣)の面前で破り捨ててしまったからだという。菊池の数学者としての才能に、かねてより疑問をもっていたことからくる日頃からの反目があったらしい。

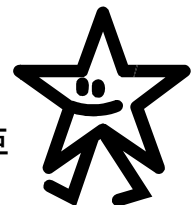
ちなみに、菊池の写真も残っている。記録によると菊池は明治26年に山口高等中学校に視察のため来校。この再会を二人は喜んだのだろうか。



<逸話その② 晩年>

文部省視学官、長崎高等商業学校長などを経て、晩年は天文学が昂じたのか、占星術にハマっている。西洋占星術を日本に初めて紹介した。

山一証券の創業者小池国三は、隈本の占星術による景気予測によって巨万の利益を得たと言われている。



恩師たち

■ 設立・運営に貢献



毛利元徳
防長教育会長
〔防長先賢肖像絵葉書〕より



原保太郎
山口県知事



森有礼
文部大臣



井上馨
防長教育会顧問
〔当時は外務大臣〕



品川弥二郎
防長教育会幹事
〔防長先賢肖像絵葉書〕より



エミール・ハウスクネヒト
帝国大学雇教育学教師

■ 主な教官



隈本有尚：教頭
数学・物理・天文
(後に文部省視学官)



河内信朝：初代校長
(後の官立山口高等学校第3代校長)



堅田少輔：英語
(後に衆議院議員)



井原百介：幹事、博物学
(後に大阪高等農学校長)



岡田良平：第2代校長
(後に文部大臣)



加藤彰彦：
英語・歴史・哲学・理財学
(後に松山高等商業学校長)



谷本富：倫理・歴史・哲学
(後に京都帝国大学教授)



實吉益美：数学・物理
(後に学習院教授)



湯原元一：独逸語・歴史・博物
(後に東京高等学校長)

山口大学の来た道2 山口中学校から県内初の高校創立まで



土井助三郎:
物理・化学・地質学・鉱物学
(後に名古屋高等工業学校長)



頓野廣太郎:
地理・物理・化学・測量
(後に中央気象台技師、
頓野私立山口測候所開設)



ロメイ・ベッキ:英語
(雇外国人教師、
米人宣教師で博覧強記の学者)

肖像写真について

ここに紹介したセピア色の肖像は、名刺判写真である。河内信朝校長の長男才三氏から山口高商時代の昭和15年に寄贈されたものが、今日に至るまで残っている。

肖像写真をキャビネ判あるいは名刺判にして配ることが当時の流行だったのだろうか、これらの写真も校長への新任挨拶の際に名刺代わりに使用されたようである。

帝大文科特約生だった谷本富のものは、裏面に東京の写真師「武林」のデザインが見える。また、同じく帝大法科出身で山口地方裁判所判事だった堀三友のものは、山口八坂神社内にあった松原写真館で作成したものと思われる。



谷本富の名刺判写真裏面



堀三友の名刺判写真裏面



旧松原写真館(河村写真館)

明治20年前後に旧士族の松原繁が写真館として建築したと考えられ、その後河村写真館に変わった。

建築当時から今日まで、所有者を変えながらもおよそ120年にわたり写真館として使用され続けたことは、国内においても他に例が無く、建築当時の原形をよく留めており、県の文化財に指定されている。

三大節の行事

御真影^{ほうたい}奉戴と天長節

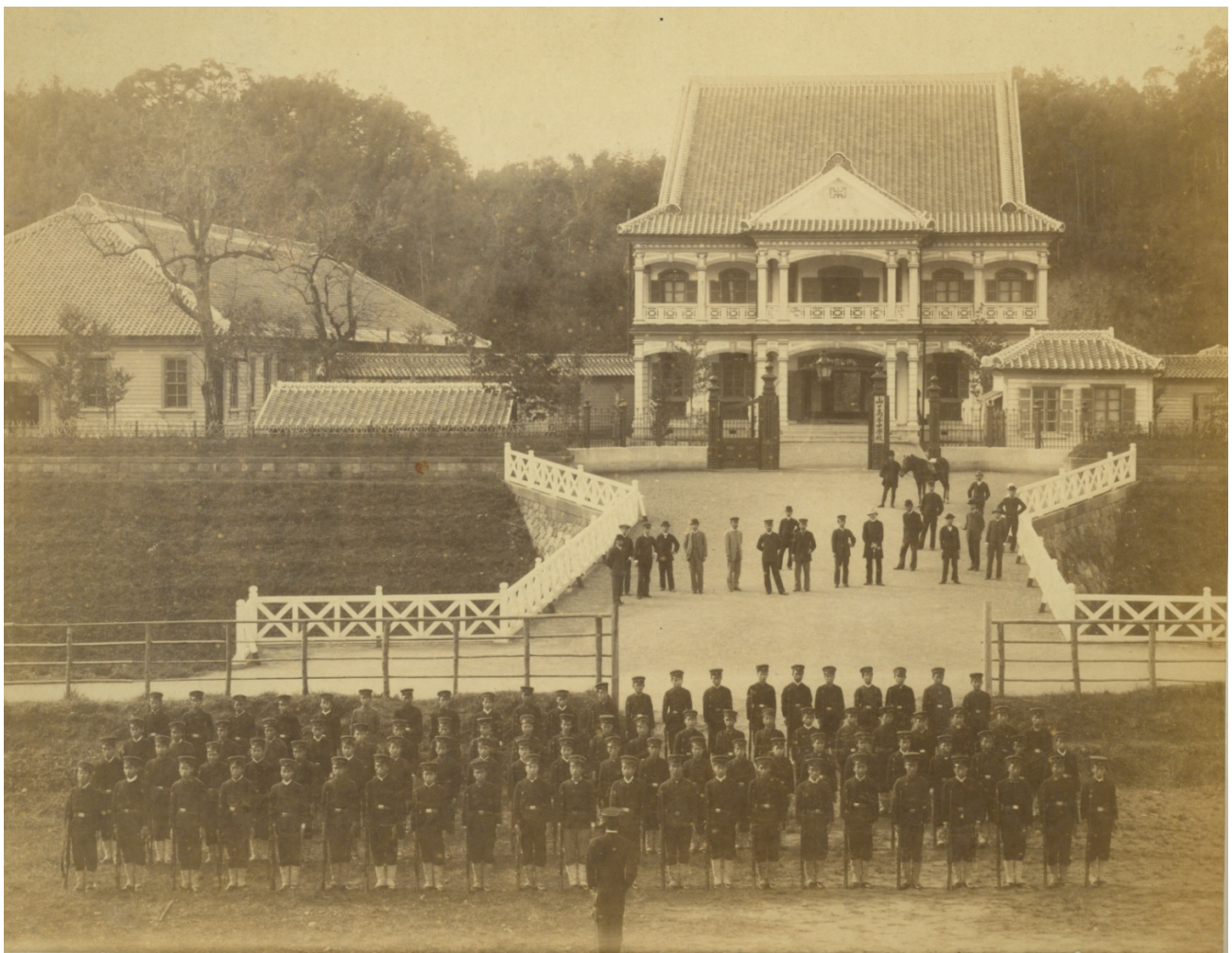
山口高等中学校では、三大節(※)には拝賀式を、7月30日には天皇陛下行幸記念式を行うこととしていた。

明治20(1887)年には、天皇陛下の御真影が下賜され、同年11月3日には御真影奉戴後最初の天長節を挙行政した。

式典では河内校長の式言の後、職員生徒が御真影に奉拝し、次いで生徒による奉祝演説があつた。その後、運動場において祝賀運動会を開催した。銃槍試合や剣術試合などを行い、職員生徒一同で記念写真を撮影したという。

※三大節とは

四方拝(1月1日に行われる宮廷行事)、紀元節(『日本書紀』にいう神武天皇即位の日)、天長節(天皇の誕生日)のこと



正門前の体操場にて記念写真

学内組織の創設

学友会の成立と「学友」創刊

学内の新興機運の高まりと、中央学会での学術文芸雑誌の刊行の影響を受けて、明治21(1888)年12月、「学友会」が組織された。当時の会則には、学術を研究し知識を交換し友誼を厚くすることを目的とするとうたわれている。

翌年には、月刊雑誌「学友」が創刊され、学術論文の他、文芸や学内の雑報などが掲載された。

その後、学友会は一時門戸を校外にまで広げ、名称を「山口県学友会」としたが、明治26年、「山口高等中学校学友会」と改称し、会員を「本校生徒並に本校と関係ある者」とし、学内団体としての性質を明らかにした。



「学友」表紙

同窓運動会

○同窓運動會 今回山口高等中学校生徒相謀り同窓運動會を設立し校長河内信朝君之の會長とあり過る二月十一日紀元節同校運動場於て第壹回春季大運動會を舉行せられたる此日夜來の積雪三四寸曉天猶雪色を帯びたるも漸々天氣回復し午前九時全校生徒紀元節祝賀を畢り午後零時卅分銃劍兵裝運動場に出て同生徒の作に係る春季大運動會餘興歌を高吟し是より全生徒を二隊に分ち對向射撃を行ひ畢て「ローンテニス」鉛丸投福飛高飛旗取圍旋「ベースボール」等の遊技あり此間校外有志者の擊劍數回を挾み「フットボール」繩引等々運動あり優等者に賞品を與へ午後四時二十分解散せり當日の運動は全員を赤白二群に分ち「フットボール」の勝者には美麗なる賞旗を與る筈ありしも勝敗決せず爲に之を他日に延すととみれり此日は大日本憲法發布の大佳

「学友」掲載の同窓運動会の記事(抜粋)

記事からは当日の天候や競技の様子がうかがえる

学友会に次いで、明治22年、体育の奨励を目的として同窓運動会が創立された。2月11日の紀元節には憲法発布式の祝賀を兼ねて第1回大運動会を開催した。以降、春秋に大運動会、毎月遠足登山等を行った。

明治24年には、「山口高等中学校同窓運動会」と改称し、職員生徒は会員となることを義務とした。これ以降、運動会は毎年紀元節か卒業式当日に行われたが、蹴球、野球等各部が発展するにしがたが、相互の対立が生じるようになった。寄宿舍事件の影響もあり校内の各種団体の指導に一層注意をはらう必要があったため、明治27年には会則を改正し各部の対立を一掃し、さらに学生の体育向上と心身鍛錬に資することとなった。

寄宿舎の生活

寄宿舎は以前からの旧舎を引き継いだ^が、明治19(1886)年の改築を機に、教員の当直により生徒の生活を指導・監督する生徒監事の制が設けられるなど、寄宿舎制度も刷新された。より多くの生徒の収容が可能となり、通学に不便な生徒の便宜を図るだけでなく、一層生徒の訓育の場としての側面に重きが置かれるようになった。

衣 明治19年から制服・制帽の着用開始



当時の規則によると、寄宿舎内でも基本的には制服で過ごしていたようである。

寄宿舎ニ在テハ居住制定の服装ヲナスヘシ
病氣ノ為止ムヲ得サル場合ニ於イテハ寄宿舎掛ノ指図ヲ受クヘシ
(寄宿舎細則第3条より)

制服着用時の生徒(明治43年頃)

食 食事は外部委託で、^{まかないかた}賄方が作った献立を舎監が検閲

1人1日の食量は米5合1勺で、食費は1日7銭前後であった。(新築寮舎が落成した頃は、脚気症患者が多いことを考慮し、麦飯を採用していたようである。)

明治26年頃からは、食事委員の生徒が検閲を任されるようになり、高等学校に改制後の明治32年、生徒による自炊制になった。

住 明治19年、校舎大改築、新築寮舎が完成

以前の寮舎は1棟7室で希望者のみ収容としていたが、平屋2棟30室の新築寮舎の完成を機に、自宅通学か保証人宅通学を除き、生徒は全員寄宿舎に入舎させる方針とした。しかし、実際には部屋不足で完全には実施できなかった。

その後、何度かの改築を経て少しずつ部屋不足が解消され、高等学校へ改制後の明治28年の全棟改築に至り、全寮制がほぼ実現することとなる。



寄宿舎(明治20年頃の全景写真より抜粋)

左から 乙舎(南寮)、甲舎(北寮)、食堂・賄所、納屋(奥に炊爨所・浴室等)

■居住スペース 平屋2棟

制服として洋服着用が定められたことにともない、室内にはテーブル・椅子・寝台が置かれていた。各棟1室は舎監の部屋が設けられている。

- ・ 自習室：乙舎(南寮)14室・・・1室4坪 6人収容
- ・ 寝 室：甲舎(北寮)16室・・・1室4坪 4人収容
- ・ その他の部屋

応接所(来訪者とは応接所で面会し、部屋に入れることは禁止)

吸煙室 ※法律により未成年者の喫煙が禁止されたのは明治33年以降

音読室(発音が必要な学習を行うための部屋)

懲戒室

- ・ その他別棟

食堂・賄所^{すいきん}1棟 炊爨所1棟 浴場1棟



食堂の様子

生活費 (明治24年当時)

宿舍費：無料 / 食費:月2円10銭程度 /
炭油料:月15銭程度

授業料：本科月1円(予科60銭)

合計：月4円～6円程度(その他 書籍・被服費等含む)

寮生の1日

当時の規則によると、食事・入浴・就寝時間以外は自習時間に充てられていた。自習時間中は1部屋(6人部屋)毎に1人、寮生から選ばれた「机長」が取り締まりを担当しており、雑談・笑話することは禁じられていたのはもちろん、就寝時間まで許可なく寝室に入って休むこともできなかった。

また、稗史小説(通俗小説)の閲覧・囲碁・カルタ等の遊戯は禁止とあり、娯楽の類は禁じられていたようである。もっとも、規則通り過ごしていたとすれば、そのような時間はなかったと思われるが・・・。

朝飯後ヨリ始業時マテ及帰舎門ヨリ限就寝時マテヲ自修時間トス(寄宿舍細則第6条)

自修時間ハ静肅ヲ旨トシ猥リニ他席ヲ侵シ或ハ雑談笑話スル等凡テ他人ノ勤学ニ妨害アルコトヲ為スヘカラス(同第7条)

就寝時間ノ外ハ奇宿舍掛ノ許可ナクシテ寝室ニ入ルヲ許サス(同第14条)

寮生の生活は、舎監により管理・監督され、門限厳守の上、外出は厳しく制限されていた。外出する際は、事前に手続きを踏んで許可を得た上で、門衛に許可書を見せ、門限に遅れる時は保証人の証明書を添えて手続きしなければならなかった。常時、舎監による朝夕の点呼が行われていたが、就寝時間などに抜き打ちで行われることもあったようである。

寄宿舎事件

教師への不満が爆発！前代未聞のストライキ

当時の授業は西洋文化の直輸入であり、それを平気で教育の定立とする教師の無責任さに生徒の不平・不満はたまっていった。

明治26（1893）年11月3日、寄宿舎の生徒が校庭で発火演習をし、翌日の代休を願い出たが許可されなかった。演習の疲労と一部教師への不満が爆発し、生徒たちは授業をさぼり、4日深夜に騒ぎ出した。制止した教員に石を投げつけ、消防用の手押しポンプを放水するなどし、河内校長は寄宿舎生徒全員の退去を命じた。生徒たちは学校の東方の豎小路の宿屋に分宿し、団結を誓い合った。

寄宿舎生徒は全員退校処分となり、これに同情した通学生も除名処分となった。事件解決のため、文部省参事官の岡田良平が派遣され、文部局の菊池謙二郎が赴任した。三浦梧楼（予備役陸軍中将）が仲裁に入り、処分を受けた生徒の復学が認められた。



三浦梧楼

これで一旦事件は収束したように思われたが、河内校長が約束した教員の転職が守られなかったため、生徒たちは再ストライキに踏み切った。「馬耳東風」戦術を使い、ノートも鉛筆も持たず教室に入り、黙って座ったまま授業を受けた。学年末には、大学進学を控えた上級生がストライキをやめるように主張しはじめたが、そのうちに約束の教員もみな転出し、生徒の全勝に終わった。なお、この事件の責任を負い河内校長は辞職した。

こぼれ話

夏目漱石『坊っちゃん』の舞台は愛媛ではなく、山口だった!?

『坊っちゃん』の舞台は愛媛県松山市の中学校だが、実は山口県だという説がある。明治26年の山口高等中学校での寄宿舎事件は、東京・大阪の新聞に大きく報じられた。この事件の十数年後に、雑誌「ホトギス」で『坊っちゃん』が発表されており、作品内のバツタ騒動のヒントになっているというのだ。

実は、夏目漱石は山口高等中学校赴任を4度も断っている。明治28年、愛媛県立尋常中学校へ赴任直前に山口高等中学校に赴任したばかりの菊池謙二郎から誘いをうけたが、松山行きの先約があるといって断った。寄宿舎事件解決のため、山口高等中学校に派遣された文部省参事官の岡田良平も漱石を誘ったが、山口には来なかった。こういった関わりから、漱石は事件の経緯について知っていたと思われる。

ちなみに、岡田は『坊っちゃん』の作中人物「赤シャツ」のモデルとも言われている。

県内初の高校誕生

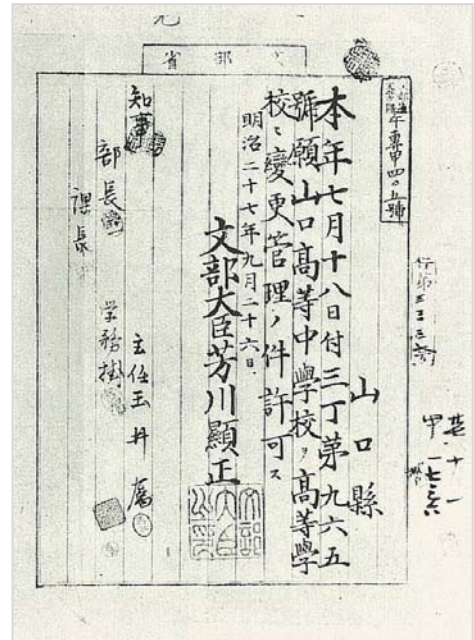
学制改革により高等学校へ

高等中学校の制度が確立して7年後の明治27（1894）年6月、高等学校令が公布され、高等中学校は高等学校となった。これに伴い、山口高等中学校も同年9月27日文部省告示第8号によって「山口高等学校」と改称された。（以下、「旧山高」という。）

当時全国に開設された高等学校は第一から第五までの高等学校と旧山高の6校のみで、当時の高等学校は、法令上は専門学部が主体であるが、帝国大学予科としての性格が強く、旧山高も修業年限3年の「大学予科」とした。

校則等は概ね高等中学校時代を踏襲した形で制定されたが、修業年限が1年延長して3年となったため、組織改正にあたっては、学年のスライド等、旧制度の生徒に対して種々の配慮がなされた。

また、学制改革の結果、旧制度の高等中学校予科は廃止になったが、残存する生徒の為に、大学予科の下にしばらく旧高等中学校予科を存置し、翌年4月、山口県尋常中学校の設置をもって全てが解決した。



山口高等学校管理許可指令書
（『山口高等商業学校沿革史』より）

第3年	一部	法科	5	12	52
		文科	7		
	二部	工科	15	18	
		理科	3		
		農科	0		
	三部	医科	22	22	
第2年	一部	法科	20	27	66
		文科	7		
	二部	工科	18	18	
		理科	0		
		農科	0		
	三部	医科	21	21	
第1年	一部	法科	24	29	105
		文科	5		
	二部	工科	48	51	
		理科	1		
		農科	2		
	三部	医科	25	25	
合計					223

生徒学級別人員表(明治30年9月末日調)
（『山口高等学校一覽』より）

山高は時代と共に3校あって、
後の山口高商に繋がるこの官立山口高等学校を
旧山高と呼び、
大正8年に創立する官立山口高等学校を
旧制山高と呼んで、現在の県立**山高**と区別
しているよ。



地元優先の入学制度

全国では高等学校大学予科に入学できる者は、年齢17歳以上で尋常中学校を卒業した者とされ、募集人員を超過する場合は選抜試験を行っていた。しかし、成立に特殊事情のある旧山高においては、高等中学校時代からの慣例で県内在籍者に対して優先入学の特典を認めており、山口県尋常中学校卒業生はことごとく無試験で入学できる上、授業料も半額だった。しかし、全国的に高等教育熱が高まり入学志願者が急増する明治30年以降は、この優遇制度を維持することが難しくなっていた。



山口高等学校帽章
(明治28年)

教官保証制度の創始

岡田校長の発案により、独自の制度として、生徒の保証人2名の内、1名は必ず旧山高の教官を充てていた。一人の教官が受け持つ生徒数は約20~30名で、保証教官の仕事は生徒指導全般に及んだ。学業や素行に注意し、舎監や担任教官と連携し、父兄とも連絡を密にして生徒指導に完璧を期した。場合によっては授業料や修学旅行費の立替や援助を行うなど学業・生活全ての面で補導訓育に当り、個人指導を徹底していた。この制度は後の高等商業学校にも引き継がれている。



在学証書

明治30年の在学証書には、生徒「鮎川義介」が提出したものがあつた。(左)

また、別の生徒のものには当時旧山高で英語や独逸語を教えていた哲学者「西田幾多郎」の名が保証人の欄に記載されている。(右)



全寮制の実施

高等中学校時代から増改築を繰り返していた寄宿舎だったが、防長教育会の資金援助により、明治28年9月、ついに全てが完成した。新築寄宿舎は南寮・中寮・北寮の3棟に分かれ、各寮2階建、全35室、階上を寝室、階下を自習室とし、談話室の設備もあつて生徒約200人が収容可能となつた。これにより、かねてからの念願だつた全寮制が実現した。

行軍演習と修学旅行

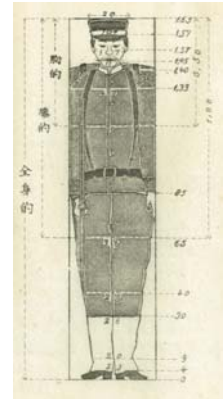
修学旅行は、明19(1886)年に東京高等師範学校が「長途遠足」の名で、行軍旅行に学術研究の要素を取り入れたのが始まりといわれている。

山口高等中学校から旧山高に改称された明治27年は日清戦争が起こった年であり、明治37年には日露戦争開戦へと時代は軍事色を強めていた。そのため、体操の授業は教師に陸軍予備将校を任用し、専ら兵式教練と行軍及び発火演習に充てられた。

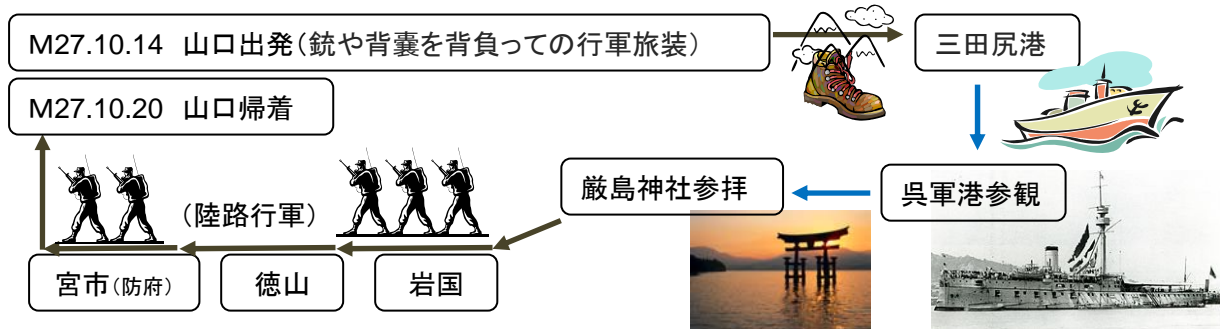
人像的(歩兵射撃教範附図)



兵式教練の教科書



<明治27年に行われた行軍演習>



例外として、明治32年から35年までの4年間は行軍演習とは別に一週間程度の修学旅行が実施された。宇佐八幡宮や耶馬溪、太宰府などの名所旧蹟や八幡製鉄所、三菱造船所などを見学した。「汽車・汽船を乗り継ぐ旅行は、行軍と違って全く貴公子的旅行である」と学友会報にその嬉しさが報告されている。年によっては出雲地方や大和地方などにも足を延ばしていた。

日露戦争の影

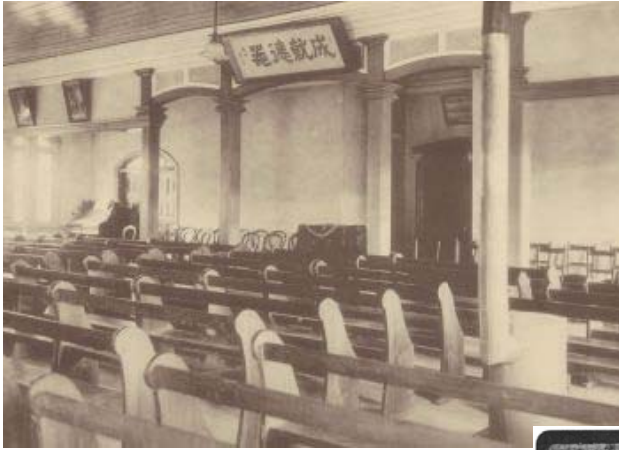
明治37年2月、日露戦争が開戦し、山口歩兵第四十二連隊が出動した5月には、松本校長以下職員生徒一同は湯田の郊外に赴き万歳三唱で見送った。

当時の様子は、「満洲の野より勝報頻りに来ると共に、一方戦死傷者も夥しく、陣没英霊の凱旋相次ぐや、学校哀悼無言裏に之を迎へ、悲壮なる劇的の送迎が幾十度となく繰り返された」と『山口高等商業学校沿革史』に記載されている。

結局、旧山高からは総勢13名の教職員が召集され、うち2名戦死、2名が負傷した。特に体操教官については、補充する度にすぐ召集されるため、後任者もままならず、明治37年末には山口留守連隊下士官を派遣してもらって学期末の試験を辛うじて実施した程だった。

小松宮親王殿下の御染筆賜る

旧旧山高時代の皇室関係事項としては、皇太子殿下御成婚(明治33年5月)、皇太孫殿下御誕生(明治34年4月)と慶事が続き、校長は参賀のために上京、職員生徒一同は講堂に於いて奉賀式を挙行了した。



講堂の扁額
(『山口高等商業学校卒業記念アルバム』より)

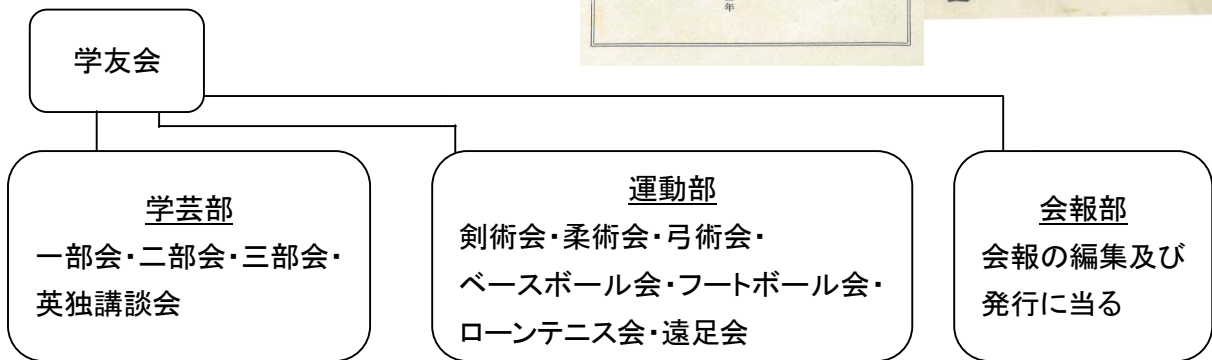
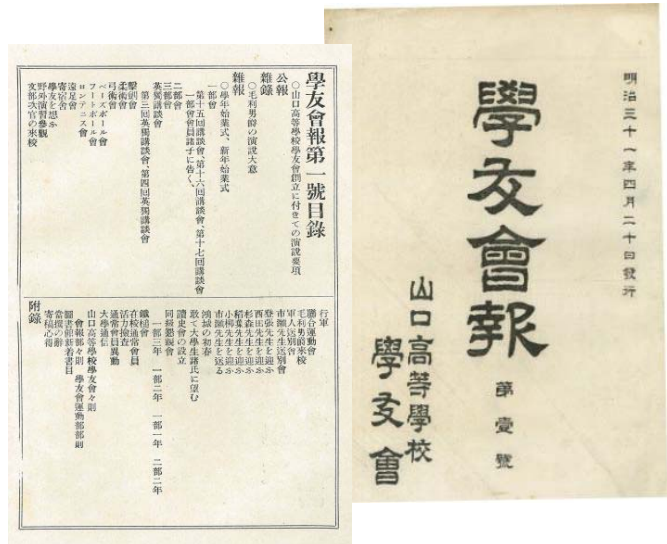
また、明治34(1901)年4月には、日本赤十字社総裁の小松宮彰仁親王殿下が山口支部総会に出席され、旧旧山高はその休憩所になった。職員生徒は湯田郊外に送迎し、全校挙げて歓迎行事を行った。記念に御染筆下賜を請願したところ、11月に「成就徳器」の扁額を賜った。この御染筆は講堂に奉懸され、後の山口高商時代にもわたって長く掲げられていた。



小松宮彰仁親王殿下御染筆
(『山口高等商業学校沿革史』より)

学友会の復興

山口高等中学校時代に起きた寄宿舎事件により学友会は廃止されていたが、高等学校に改称後少しずつ復興の機運が盛り上がり、明治31年1月17日「山口高等学校学友会」として正式に発会式を挙げた。



日本最初のマラソン競争

運動部陸上遠足会は、明治32(1899)年2月11日、山口一宮市(防府天満宮)間約18kmを走破するという快挙を遂げた。

当時の運動会では最長でも1,000m走程度だったため、この長距離走は各方面の注目を集め、「ジャパントイムス」や「時事新報」などもこの壮挙を報道した。



野球部の活躍

野球部の活躍も目覚ましかった。山口県内では明治30年頃から野球が盛んになったが、当時の投手は魔球(変化球)も知らず、捕手はミットも用いない状態だった。

ルールもまちまちで混乱を生じていたため、旧山高野球部が明治32年に「野球規則」を制定しこれを県内の各中学校に配布した。ルールは現在とほぼ同様だが、「四球」はファイブボールズだった。(当時は4~9球の間で随意に定めてよかったらしい。)

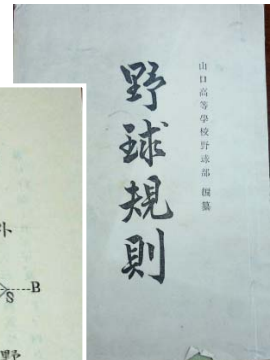
旧山高が主催して、県内中学校の野球大会を開催したり、他の高等学校と遠征試合を行うなど技術向上に熱心だった。特に第五高等学校(熊本)とは数度にわたり試合を行ったが、善戦するも健闘虚しく、ついに最後まで勝利を得られなかったようである。

山口高等學校の競争
 校にては去る十一日の紀元節を以て同校生徒の健足者等申合せて山口より宮市の間凡そ十一哩半のフットレースを催はしたるに第一若中村隆輔氏は一時二十分、第二若高嶋京江氏は一時五十分間にて着したる由なるが右の同距離の間を世界中にて最も速く走りたる人の時間は五十九分三秒時なりと云ふ

日四十月二年二十三治明

忽ち緊急事案の暇を轉じ直に、級山踏海の脚を試む嗚呼人生は學校の生活より愉快なるはなし學校の生活は運動の競争より愉快なるはなし況んや全國に於て未だ嘗て其の類を見ざる長途に飛鳥走電の技を闘はすとや山口高等學校生徒は去る十一日の紀元節を以て觀梅の行を爲せり百花の魁たる玉肌水竹は何れの地に第一の春信を歸らせるや鴻城の天香は猶ほ粉々の雪を見れども防府の地は豈に露々の香を傳ふるをからんや此より彼に至るは十一マイルあり洞道あり險坂あり大川あり腕車は二時間半を費し馬車は三時間を費し郵便脚夫すらも一時間と五十一分を費す山口高等學校生徒は此の間に競

(↑) 防長新聞 明治32年2月14日
 (←) 時事新報 明治32年2月15日



野球規則



野球をする学生たち(「山口高等商業学校卒業記念アルバム」より)

※この記事は、山口県立文書館平成23年度資料小展示「スポーツ時代史展Ⅳ 明治時代の野球」を参照しました。

続・優秀なる教師陣

旧旧山高は山口高等中学校の法令上の組織を変更したに止まるため、当初は教職員組織の変動はなかったが、以降の学事興張と生徒定員の増加にともなって教職員定員は22名から最高30名まで増加した。旧旧山高時代における校長は次のとおり。

- 初代 岡田良平(明治27年1月8日～同29年4月28日)
- 第2代 北條時敬(明治29年4月28日～同31年2月4日)
- 第3代 河内信朝(明治31年2月15日～同33年3月7日)
- 第4代 松本源太郎(明治33年3月7日～同38年3月31日)



第2代校長 北條時敬

ほうじょうときゆき

北條時敬と西田幾多郎

優秀なる人材を造るには、まず優秀なる教師が必要であるとの元山口高等中学校長・河内信朝の信条は、旧旧山高にも引き継がれ、真に学徳に秀でた人選が行われた。

第2代校長・数学者の北條時敬は金沢出身で、旧旧山高、第四高等学校、東京高等師範学校の各校長を歴任し、東北帝国大学総長、学習院院長を務めた人である。

北條が石川県専門学校で、当時学生だった西田幾多郎を教え、彼の才能を見込んで数学者になるよう強く勧めた。結局西田はこれを断り哲学者の道を選んだものの、親しい師弟関係は続き、西田を英語・独逸語教師として旧旧山高に招いたのも北條だった。西田は口数が少なく、何か宇宙の秘密でも見つけるような神秘的で眠そうな眼をしていたらしい。明治30年9月から約2年間在籍し、北條のいる第四高等学校へ転任し、後に京都帝国大学教授となった。代表的著作『善の研究』は、旧制高等学校生徒の必読書であった。



明治30年旧旧山高へ転任の際の西田幾多郎

(『若き西田幾多郎先生』より)

群を抜いた帝国大学進学率

旧旧山高の卒業生総数832人のうち、98%にあたる818人が帝国大学各分科大学に進学し、その実数は他府県の群を抜いて世に注目された。第3次伊藤内閣の文部大臣・外山正一は、『藩閥の将来』(明治32年刊行)と題する書を著し、その中で藩閥とか長閥とか言って攻撃しているが、むしろ山口県のように資金を投じて高等学校を設置すべきである、山口県からは大学に多数進学しており、卒業した学士たちが現に官・政・実業の各界に頭角を現している、と説いて学校熱をあおっている。

卒業生の進路

大学予科卒業生の帝国大学各分科大学入学は高等中学校本科の頃から無試験であったが、明治29（1896）年の分科大学通則の改正にともない、人員超過の学科については試験によって入学者を定めることとなった。

明治30年に京都帝国大学が創設され、人員超過の問題は多少緩和された。工科・理工科の人気は通則改正前から高かったが、医科への入学志望者も殺到していたため、明治36年に京都帝国大学の分科大学として福岡に医科大学が開設された。

旧旧山高12年間の卒業生は累計832名だが、その内の818名が帝国大学の各分科に進学している。

卒業年次 (明治)	進学種別											
	東京帝国大学					京都帝国大学					福岡医科大学	就職その他
	法科	文科	理科	工科	医科	農科	法科	文科	理工科	医科		
28	6	6	1	12		1						
29	7	7	1	12								
30	8	9	2	20	12	2						
31	6	5	2	9	21			3			1	
32	13	5		9	11		5	5	4			
33	5	5		6	10	1	4	7	5			
34	15	3		15	11		6	4	3			
35	11	6		10	6	1	7	8	9		2	
36	13	7	2	9	10	4	9	8	7	5	1	
37	15	9	3	4	12	4	21	21	7	5	8	
38	29	12	1	12	5	9	19	1	16	12	6	
39	42	8	3	19	16	12	9		19	16	15	2

著名な卒業生



第5回卒業生
いわたちゅうぞう
岩田宙造 (1875-1967)

光市出身。弁護士、政治家。

山口高等学校卒業後は東京帝国大学法科に進学。大学時代は防長教育会及び高等中学校

校当時の校長であった岡田良平から学費を借り受けて苦学していたが、それでも足りず、伊藤博文からも補助を受けた。これをきっかけとしてその後も伊藤からの庇護を受けるようになる。

大学を首席で卒業後、政治家を志し、東京日々新聞（現在の毎日新聞）の記者となったが、その後政治家となることを断念。

弁護士となり、明治35年に法律事務所を開設すると、宮内省、日本銀行、日本郵船、東京海上火災、三菱銀行、勸業銀行などの顧問を務め、東京帝国大学では講義もした。学生たちは講義室に充ち、人徳を慕って教えを乞う学生も多かったという。昭和6年に貴族院議員に選ばれ、本格的に政治にも関係するようになり、太平洋戦争終戦直後の東久邇宮内閣に司法大臣として入閣。続く幣原内閣においても、司法大臣として留任し、戦後の司法行政に大きな業績を残した。

岩国市出身。経済学者、社会思想家。

日本で初めて政党内閣が成立したことに関連した新聞記事に刺激され、卒業試験が間近に迫っていたにもかかわらず、文科志望から法科志望へ転じた。学校の当局者たちは反対したが、河上の決意のほどを認め、法学通論の試験さえ通れば、法科志望生として卒業を認めるということになった。法学通論の本は図書館に一冊あるだけだったので、図書館から借り、無断で半分にちぎり、友人とともに分けて読み勉強したという。その本は卒業試験後に製本して図書館に返却されている。

第8回卒業生

かわかみはじめ

河上肇 (1879-1946)



試験は無事に通り、東京帝国大学法科に進学。卒業後は東京帝国大学農科大学実科講師に就任し、明治38年には読売新聞で『社会主義評論』の連載を開始し、世評を高めた。その後、京都帝国大学の講師となり、マルクス経済学に傾倒し、研究を進める。昭和3年、京都帝大を辞職後、政治実践の場に身を投入し、昭和7年、正式に日本共産党党员となり活動を開始するが、翌年1月治安維持法違反により昭和12年まで獄中にあった。出獄後は漢詩などに親しみ、詩人として過ごした。



第10回卒業生

あゆかわよしすけ

鮎川義介 (1880-1967)

山口市出身。実業家、政治家。

母方の伯叔祖父が井上馨であり、その支援もあって山口高等学校に入学。鮎川の在学時は、軍人志望が多

かったが、井上の「エンジニアを目指せ」という一言により東京帝国大学工科へ進む。卒業後は井上より勧められた三井への入社を断り、芝浦製作所(現在の東芝)に入社し、一職工としてスタートを切った。精力的に他社工場を見学するなどして見聞を広め、渡米して鑄造技術を学ぶ。帰国後に戸畑鑄物を設立。創業期の業績は厳しく、親類縁者からの金銭的援助で経営を維持している状態だった。第一次大戦が勃発すると、その影響により経営はようやく軌道に乗る。

世界経済恐慌や関東大震災などの苦境を越え、業績を伸ばしていく中、義弟である久原房之助が病に倒れたため、久原が経営していた久原鋳業を引き継ぐこととなる。久原鋳業を日本産業と改称し、日本鋳業、日立製作所、日本水産、日産自動車などの有力会社を擁する新興財閥日産コンツェルンを形成した。鮎川が経営を引き継いだ当初は経営破綻に瀕していた久原鋳業だったが、昭和6年満洲事変からの軍需景気により、傾いていた業績も徐々に上向きになっていった。

第二次大戦後には政界に進出し参議院議員を務めるとともに、大戦後の復興のため、中小企業助成会、さらには中小企業助成銀行(後の三井住友銀行の母体)を設立して中小企業の育成に尽力した。

寮歌「花なき山」

寄宿舍茶話会歌の誕生

「鳳陽寮歌」として長く愛唱されてきたこの歌は、実は山口高等商業学校の前身であった旧山高時代の明治32(1899)年に誕生している。作者は佐々政一教授(国文学担当)である。寄宿舍に歌の無いことを残念がった佐々教授が、9月30日に開かれた自炊創立記念兼茶話会で発表し、全員で大合唱したのが始まりだった。

ちなみに、この茶話会は寮での食事が外部委託から自炊制度に変わったことを祝う会だった。当時は、「寄宿舍茶話会歌」と呼ばれていたが、山口高商時代の^{大正}11年に寄宿舍が「鳳陽寮」と命名されて後は「鳳陽寮歌」となった。



現在の経済学部前庭にある寮歌碑

「花なき山」ってどの山？

本当のところは、わかっていない。^{ほうべんざん}鳳翩山？ 龜山？ 鴻の峰？ etc…と卒業生の間では諸説ある。いかにも地味で、山口らしい山都の質素な学生生活を歌っているが、日本の寮歌の中では非常に古く、百年以上も歌い継がれているものは、全国的にも数少ない。



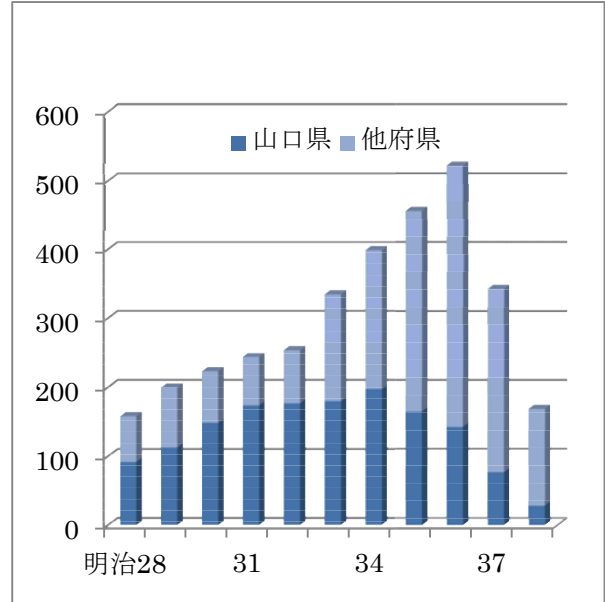
明治末頃の山口

旧旧山高の終局

統制された入学制度

明治30年頃から全国の高等学校入学志願者が急増し、文部省は大学の収容力を勘案して各高等学校の入学制度に統制を加えるようになった。そのため、旧旧山高も県内学生の優先入学特例の存続が困難になった。

更に明治35(1902)年からは全国一律の共通選抜試験が実施され、合格者の志望と試験の成績によって入学する高校が決められたので、地元の子弟が旧旧山高へ入学する自由を奪われた。発足時に過半数を超えていた県内出身者は、明治37年には20%不足となっていた。



学年始めにおける全校生徒の出身

『山口高等商業学校沿革史』より数字を基に作成

防長教育会の財政問題

明治30年以降、入学者の増加と物価高騰により防長教育会は経済的負担に耐えられなくなった。また、設立の主旨から県内の子弟に対して優先入学、授業料半減等の優遇措置をしてきたが、それらは次第に時代にあわなくなり、将来計画について苦慮せざるをえなくなった。これらのことが主な原因となって紆余曲折の末、明治38年、経費をすべて国庫に移管した。

同年7月最後の卒業式を行い、山口高等中学校から繋がる旧旧山高は19年にわたる歴史に終わりを告げた。その間の卒業生は873人。

この後は官立山口高等商業学校として引き継がれることとなる。



山口高等中学校時代を含めて3度校長を務めた河内信朝先生を讃え、大正9年に銅像が建てられた。

教える道の発祥

山口県の師範教育の推移

政府は教員の養成に特に力を注いだ。文部省は学制の制定に先立って、小学校教員の養成の重要性と緊急性の認識から小学教師教導場建立の伺いを提出し、それを受けて東京に師範学校が設立された。

山口県においても教員不足を解消すべく明治7(1874)年4月、長屋又輔・今田純一を学務掛に任命し、官立東京師範学校で30日間教則を習得させた。両人の帰県後、県は山口と岩国で教員試験所を開設し、県内の教員を30人ずつ入学させ教則を伝授した。さらに、山口の教員試験所では、県内の教員の中から優秀な6人を教則掛副手に抜擢し、山口明倫館内に設けた教場で児童40人に対して、4月から9月まで教則の授業伝授を行った。これが事実上本県最初の教師養成機関であったが、文部省の認可によるものではなく授業伝習所に過ぎなかった。



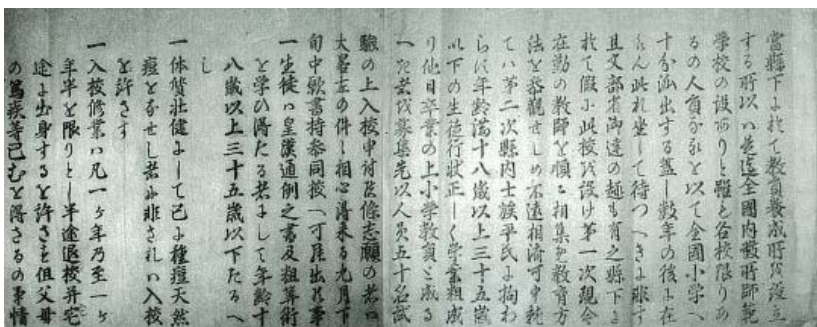
山口教学発祥の碑
(現: 山口市役所内)

萌芽期 —山口県教員養成所の設立—

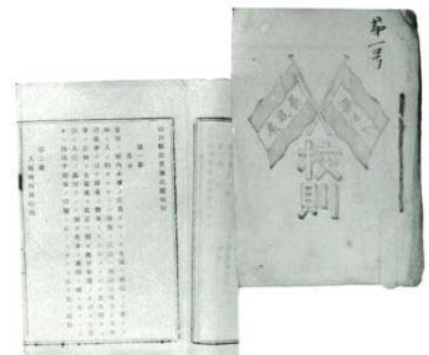
明治7年6月20日、県令中野吾一は、民費で小学校を増設しているにもかかわらず「教員其人ニ乏シク、教則其正ヲ得ス、教育其方ヲ知ラサルニ在リ」という状況であるため、教員養成を急務として文部省に教員養成所の開設を届け出た。

これにより、同年10月1日、教員試験所に隣接した山口洋学寮の施設を使い、山口県教員養成所並びに同附属小学校を設立した。本県の師範教育の始まりである。

養成所第1回の卒業生30名は卒業後、訓導として県内各地の小学校に赴任した。



教員養成所入学者募集告示



教員養成所規則

確立期 一師範学校へ

明治10(1877)年、政府は、官立の師範学校は東京のみとし、それ以外は地方に設立を委ねることとした。これを受け県は教員養成所を「山口県師範学校」と改称し、本格的な教員養成に乗り出した。初代校長は長屋又輔で鴻城学舎の校長と兼任であった。修業年限を1年半とし、文学・数学・史学など11科目を教授した。また、優秀な卒業生を10人選抜して模範教員とし、各地の小学校に赴任させた。

明治12年2月には、修業年限を2年半とし一層の充実を図り、翌年には小学校教員免許授与法を改正、試験を年4回実施することで教員免許の効力の強化と有資格者の増員を図った。また、明治16年1月には、「山口県師範学校改正諸則」を制定し、上司淵蔵が初の専任校長となった。

なお、女子児童の就学率増加にともない、女子教員の必要性が次第に高まってきたため、明治17年、3年制の女子師範学科が併設された。これが山口県における女子教員養成のはじまりとなり、以降、明治28年3月に廃止されるまで107名の卒業生を送り出した。

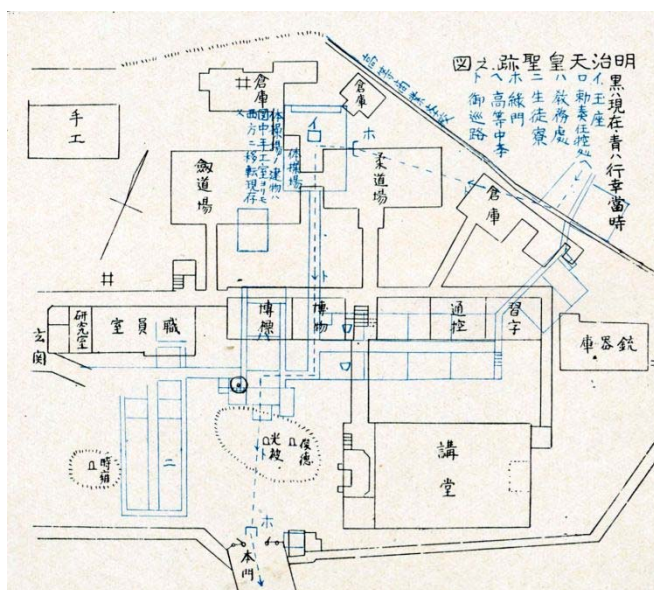
山口県師範学校は明治18年に「山口師範学校」と改称。同年7月には明治天皇行幸という名誉を受けた。



山口師範学校卒業写真(明治18年)



明治17年及び18年入学女子師範学科生



明治天皇行幸の図(青い線の部分)



行幸記念「光破」の碑
伊藤博文に上司校長が頼み作られたもの

充実期 ー山口県尋常師範学校ー

明治19(1886)年4月、師範学校令が公布され、師範学校は、小学校教員を養成する尋常師範学校と、尋常師範学校・尋常中学校の教員を養成する高等師範学校に分けられた。高等師範学校は官立で東京に1校のみとした。これが戦後の新学制まで続く日本の教員養成の原型となる。

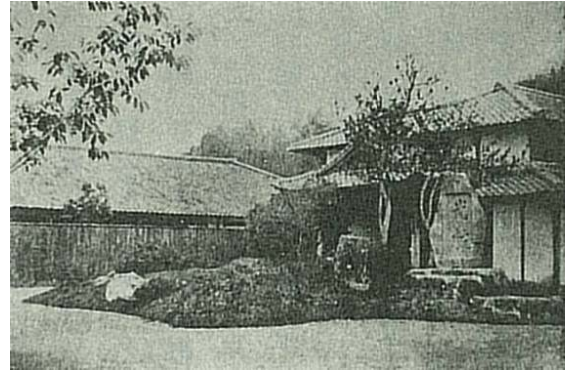
これを受けて、県は同年、山口師範学校を「山口県尋常師範学校」と改称する。この尋常師範学校は明治31年まで続き、師範教育の基礎を確立し、充実させていった。

修業年限4年とし、その学科科目は倫理・教育・国語等19科目で、農業・手工・兵式体操は男子生徒に、家事は女子生徒に課した。当時の師範学校における兵式体操は最も重要な学科であり、生きた修身科として師範教育の性格を象徴するものであった。

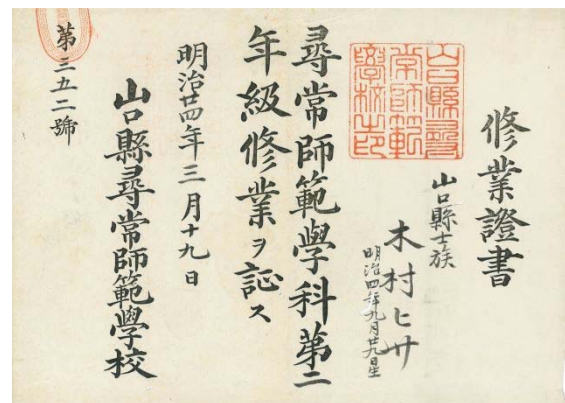
明治20年には附属小学校に幼稚保育科を新設し、これが現在の教育学部附属幼稚園の基となる。

また、自費生をやめ給費生とし、気質の鍛練と教育者の人格の養成を図るため、全寮制による兵式管理を行った。寄宿舎の兵営化は、同時に生徒の日常の兵営化でもあり、教育実践上の影響は大きかった。

明治31年、師範教育令の制定を受け「山口県師範学校」と改称した。師範教育令で「順良信愛威重ノ徳性ヲ涵養スルコトヲ務ムヘシ」とうたわれた三徳性^{かんよう}の涵養は、わが国の師範教育の根幹をなす考えとなり、これは敗戦までおよんだ。

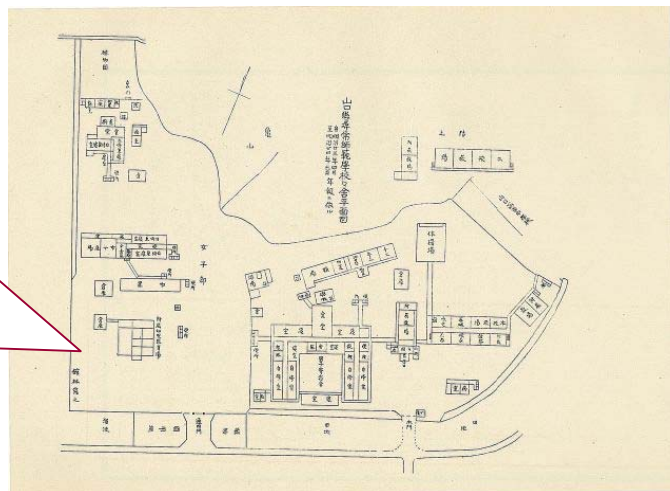


校舎(明治20年頃)



修業證書

「木村ヒサ」は現在の中村女子高等学校の発展に欠かせない人物となった



整備拡張され充実した校舎図(明治24年頃)

師範教育の先駆者 かみつかさえんぞう 上司淵蔵



嘉永2(1849)年4月16日、周防国佐波郡(現在の防府市)宮市に生まれる。上司家は代々「東大寺候人」(奉公人)として周防国衛に在住していた。

初め三田尻の越氏塾で学び、明治元年に山口明倫館に入学。その後舎長となり明治5年、山口中学の助教として任用される。その後、教員養成所の幹事兼教師となる。明治16年9月、山口県師範学校長となり、明治29年の辞任まで13年間の長きにわたって生徒の教育と学校の発展に尽力した。山口県の教員養成は上司のもとで急速に進展し、教える道の先駆者として今もなお尊敬されている。

「先生の師範学校にあるや、生徒を愛すること子の如く

学校を愛すること家の如く」

上司は生徒を厳しく教育したが、生徒からは「叱責せらるれば叱責せらるるほど益々先生の許にいきたくなる」と慕われた。忠孝にして義勇、特に皇室を尊ぶ心は強く、常に世の進歩のために率先して実行する人だったという。

墨蹟の収集

明治12、3年頃より、儒学の墨蹟の蒐集をはじめ。「福澤の説流行して、儒学は殆ど世に捨てられたるが、余はかの維新事業も徳川三百年の涵養したる儒者の力多きに居ると思ひ、せめてその墨蹟なりとも散逸せしめず、保存して他日の資とせむ考なり」という信念のもと、20年ほどかけて約百二十もの墨蹟を蒐集した。

亀山に毛利公銅像建立

忠孝を重んじる上司は忠正公勤王の功を敬い、銅像建立に大いに貢献した。その功を讃えられ、毛利元昭から祝いの歌を頂戴した。明治33年4月15日、毛利敬親を含め五基の銅像を亀山に建立。この銅像のうち毛利敬親のもののみ今の亀山に残っている。



亀山に建立された銅像

農業教育の芽生え

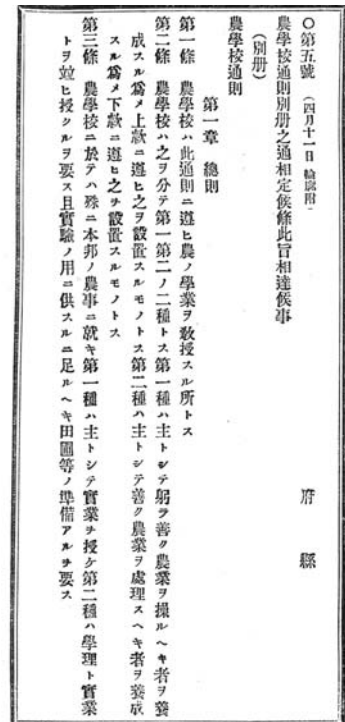
農学校

学制による農業教育

政府は富国強兵、殖産興業の推進のため、近代的な学校制度への改革に着手した。わが国の農業教育は殖産興業の一環として、西洋農学導入の指導者養成のためのものであった。駒場農学校、札幌農学校が最初の高等専門の農学校である。当時、文部省の学制による農学校は設置されていなかった。

明治16(1883)年4月、文部省により「農学校通則」が定められ、中等教育としての農業学校の制度化が進められた。

全文17条からなるこの規定は学制による農業教育制度の最初のものとして重要な意義をもったが、3年後には廃止され、それとともに全国の多くの農学校が閉鎖されることとなった。



山口県の農業教育

農学校通則 (明治16年)

—山口農学校の誕生—

山口県は明治11年に国から煙草の種子などの配布を受け、山口上宇野令(中央2丁目現市民館)に栽培試験場を創設し、樹苗・草花・果樹などの栽培試験をはじめた。明治16年には、場内に在学3年課程の農事講習会を開設し、農家の子弟を対象に農業教育を行うようになった。翌年には、獣疫の流行から獣医の必要に迫られ、獣医講習会を併設した。

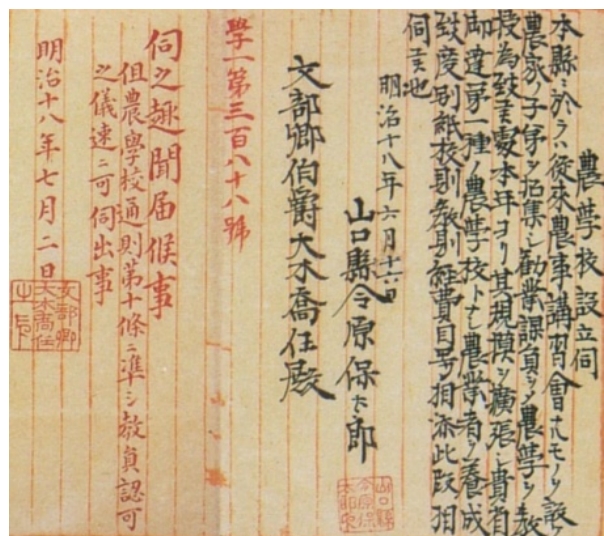
明治18年、「獣医免許規則」が公布されたことにより獣医学校または、農学校の必要が認められ、県は両講習会を廃し、第1種(※)の農学校として「山口県山口農学校」を同場所に開設した。同時に獣医学科を設置し修業年限2年で獣医を養成した。全国に獣医学科は6校設置されたが、農学校に獣医科を設けていたのは、山口、宮城の2校のみであった。

こうして県で最初の実業学校としてスタートした農学校は県下農業教育機関の中心となり、農業の振興と地域文化の向上に寄与する人材の養成を目指した。

※農学校通則により以下のとおり定められている。

第1種: 小学中等科卒業の学力を有し、15歳以上。修業年限2年で、実務につく者の養成を目的とする。

第2種: 初頭中学校卒業の学力を有し、16歳以上。修業年限3年で、学理と実業を受けることを目的とする。

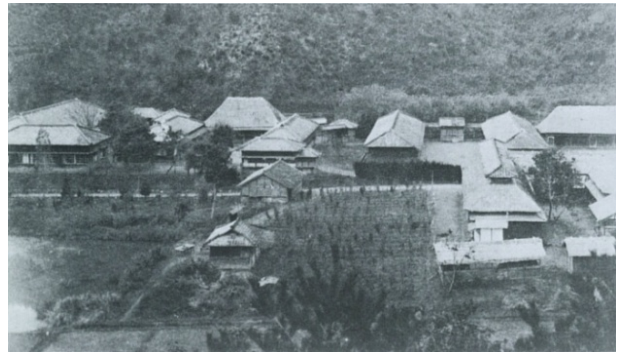


農学校設立伺(明治18年)

山口農学校の移転 ひかみ -氷上校舎-

明治18年に開校した山口県山口農学校も時代の進展とともに敷地が狭くなり授業や実習に支障をきたすようになったため、明治23年11月に大内村氷上に移転することになる。

氷上校舎全景



文部省は、日清戦争を契機として実業教育制度改革に意欲的に取り組み、実業補習学校・徒弟学校・簡易農学校規程等を制定した。

明治27年の簡易農学校規程によって、農業教育は実利的な方面に重点がおかれるようになった。そのため県は明治28年4月、先に移転した氷上校舎に山口県簡易農学校を併設した。しかし、その後31年には山口県農学校に併合し、簡易農学校は3年でその歴史を閉じることとなる。

さらに文部省は明治32年に実業学校令を制定。これを受けて山口県は、甲種(農科・獣医科)と乙種(農科・養蚕科)農業学校を開設し、山口県農学校を「山口県農業学校」と改称した。明治43年には氷上から吉敷郡小郡町に移転した。

このように教育制度の改変があり、校名、修業年限、定員に変動があったものの山口県立農業学校は、山口県の農業教育に大きな功績をのこしていった。

山口農学校の先生

たかおかただよし
初代校長 高岡直吉 (1860—1942)

島根県津和野出身。札幌農学校(現北海道大学農学部)卒業後、明治18年7月、26歳の若さで山口県山口農学校の開校と同時に校長となる。在職1年2か月の間に農学校の教育発展の基礎づくりに貢献。特に英語教育に情熱を注ぎ、全国にさきがけ英語科の新設を実現。後、宮崎県知事、島根県知事、札幌初代市長を歴任する。



にかいじゅうろう
二階重楼 (1859—1932)

萩市出身の植物学者。明治18年から17年間山口県山口農学校で教える。明治21年、日本人として初めて山口県で植物標本を採集・製作。山口県の植物学者の開祖。



ミドリヨシノ

萩市の指月山のみにある山口県指定天然記念物。二階重楼が発見したソメイヨシノの変種。額が緑色のため開花すると薄緑の梨の花のように見える。

年表 -明治-

		教育関連事項	県域事項	国内・海外事項
明治元年 (1868)	山口明倫館	長崎から英語通訳伊藤弥次郎を招き、山口明倫館兵学寮に英学科を新設 明倫館を文学・兵学の2寮にわけ	鳥羽・伏見で幕府軍と戦い、以後戊辰戦争に出兵 藩治職制による改革着手	鳥羽伏見の戦 五箇条の御誓文 戊辰戦争開始。新政府、開国和親を布告 江戸開城、江戸を東京と改称
明治2年 (1869)		明倫館の小学規則などを制定し学制を改革する	長薩土肥の藩主とともに版籍奉還を建白 毛利元徳家督相続、山口藩知事に就任 大村益次郎死去 諸隊反乱(脱隊騒動)おこる。百姓一揆あいついでおこる	版籍奉還 東京遷都 戊辰戦争終結 スエズ運河開通
明治3年 (1870)	山口中学	中小学規則の公布により萩明倫館を萩中学に山口明倫館を山口中学と改める 諸郡の郷校を小学と改称、山口中学の管轄になる	議事館を藩庁と称し、以後常備軍編成・禄制改革すすむ 山口藩で藩治の職制を改革、政事堂を藩庁と民事局を郡用局と改称、大属等の諸役をおく	普仏戦争。(～1871) 平民に苗字を許す
明治4年 (1871)		山口中学に独人ベルリンを雇いドイツ学伝習所を開設する 山口中学に外国人教師英人ダルネー夫妻を招請する	徳山藩を廃し、山口藩に合併 廃藩置県で山口県・豊浦県・清末県・岩国県の4県を設置 4県を改め山口県を置く。萩・岩国・赤間関に支庁を置く 山口藩庁を山口県庁と改称	戸籍法制定 新貨条例 廃藩置県 全国3府72県となる ドイツ帝国成立(～1918)、ビスマルクが初代宰相に就任
明治5年 (1872)	山口変則中	山口・萩・岩国・豊浦の4変則中学を設立 旧藩の学校廃止。山口中学は学規改更のため一旦停止する	全国にさきがけ医術試験を実施 地租改正に着手	学制制定 新橋・横浜間鉄道開業 太陽暦を採用
明治6年 (1873)	山口変則小学	4変則中学を廃し、山口変則小学・萩変則小学を設立	「山口県新聞」創刊 山口、赤間関などに電信局を開設 県庁に官民協同の県会(山口県議会の前身)を開設	郵便料金が全国均一となる(書状は市内1銭・市外2銭) ウィーン万国博覧会開幕(-10月31日)、日本が初めて公式参加
明治7年 (1874)	鴻城学舎	山口・岩国に教員試験場を開設 山口教員養成所及び同付属小学を設置。 山口・萩両変則小学を鴻城学舎・巴城学舎とする	山口医院(旧、山口好生堂)を三田尻にうつし、華浦医院と改称する 中野悟一、山口県令となる	讀賣新聞創刊
明治8年 (1875)		鴻城学舎・巴城学舎を毛利家の私立とする	広島歩兵第15大隊、山口に分屯 旧長府藩主の寄付により私立豊浦学舎創立	京橋の風月堂がビスケットの販売を始める。
明治9年 (1876)		山口裁判所開庁 10月26日前原一誠らにより萩の乱おこる。 12月3日鎮圧。前原一誠処刑	山口裁判所開庁 10月26日前原一誠らにより萩の乱おこる。 12月3日鎮圧。前原一誠処刑	家禄制度廃止 グラハム・ベルが電話機を発明 東京女子師範学校附属幼稚園(現・お茶の水女子大学附属幼稚園)開園(日本初の幼稚園)
明治10年 (1877)	私立山口中学校	山口県教員養成所を山口県師範学校と改称	鴻城新聞創刊 木戸孝允死す 萩に県下最初の器械製糸場を設立 華浦医学校廃校	西南戦争 第1回ウィンブルドン選手権 アメリカのエジソンが蓄音機を発明
明治11年 (1878)		山口市白石に山口栽培試験場開設 鴻城学舎を私立山口中学校、巴城学舎を同萩分校と改称		
明治12年 (1879)	山口県師範学校		第1回県議会開く 県下2ヶ月にわたりコレラ流行	大阪で朝日新聞創刊 琉球藩廃止され、沖縄県となる 学制廃止、教育令を制定 エジソンが白熱電灯を発明
明治13年 (1880)		県下を5学区に分け、岩国・徳山・山口・豊浦・萩に県立中学校を設置 山口県、私立学校条例制定	馬関物価日報創刊 華浦医学校を再興、山口県医学校と改称	改正教育令
明治14年 (1881)	山口県山口中学校		竜福寺全焼 笠井順八ら小野田にセメント製造会社を設立 山口に土族製糸伝習所を設置 中村ユス創設の裁縫場を中村裁縫伝習所	明治生命創業(日本初の生命保険会社)
明治15年 (1882)		山口県教育会設立		上野動物園開園 サグラダ・ファミリア教会建設開始
明治16年 (1883)		山口県中学校諸則の制定 農学校通則公布 山口栽培試験場内に農事講習会を開設	内務省、下関に気象観測所を開設、明治20年4月下関測候所と改称 山口に山口県病院を新築 柏木幸助、検温器製造法を発明	官報第1号を発行 天気予報開始 オリエント急行開通 鹿鳴館開館

		教育関連事項	県域事項	国内・海外事項		
明治17年 (1884)	山口県 山口中学校	萩・豊浦・徳山・岩国の4中学校を山口中学校の分校に 山口県師範学校に女子師範学科を設置 防長教育会の設立(毛利元徳らの主唱) 山口栽培試験場内に獣医講習会を開設	「防長新聞」創刊(吉富簡一)			
明治18年 (1885)		山口県師範学校を山口師範学校と改称 農事講習所を廃し、山口農学校開校 獣医学科設置	明治天皇山口へ行幸 元大審院長玉乃世履自殺	内閣制度創始。伊藤博文初代内閣総理大臣となる。(外務井上馨、内務山県有朋、司法山田顕義、法制長官山尾庸三) 日本銀行券発行開始(拾圓券)		
明治19年 (1886)		山口師範学校を山口県尋常師範学校と改称 山口中学校を山口高等中学校とし、文部省の所管とする	県令を県知事と改称	小学校令・中学校令・師範学校令公布 「帝国大学令」公布。東京大学を帝国大学と改称		
明治20年 (1887)	官立山口高等中学校	山口農学校	山口県尋常師範学校	山口早間田に私立山口女学校(山口中央高校前身)開校	中央气象台発足	
明治21年 (1888)				日本赤十字社山口支部創立 狩野芳崖死す	「君が代」を国歌と定める	
明治22年 (1889)				鴻城義塾創設	馬関新聞の創刊	「大日本帝国憲法」「皇室典範」発布 第1次山県有朋内閣成立 東海道本線開通
明治23年 (1890)				山口農学校を大内村氷上に移転		第1回衆議院議員選挙行われる 教育勅語発布
明治27年 (1894)				「高等学校令」公布(高等中学校を「高等学校」改称・改組) 山口高等中学校を山口高等学校と改称	防府市中関に三田尻製塩売捌所を設立	日清戦争起こる
明治28年 (1895)	官立山口高等学校	山口県農学校	山口県尋常師範学校	山口農学校を山口県農学校と改称 防長教育会経営の山口学校を尋常中学校に	日清戦争の講和条約、赤間関春帆楼にて調印	台湾総督府開庁
明治29年 (1896)				防長実業新聞の創刊 山口県農事試験場が大内村(山口市)に設立 赤間関に関門汽船株式会社が創立	第1回オリンピック開催(アテネ) 明治三陸大津波(死者2万名)	
明治30年 (1897)				初の県会議員選挙を施行 渡辺祐策、宇部沖ノ山炭鉱会社を設立 山陽鉄道広島-徳山間の開通 歩兵第42連隊山口に	帝国図書館開館 「師範教育令」公布	
明治31年 (1898)				山口県尋常師範学校を、山口県師範学校と改称	山陽鉄道徳山-三田尻間開通	児玉源太郎が台湾総督に就任
明治32年 (1899)					柏木幸助ジアスターゼを発見	中学校令改正、実業学校令、高等女学校令公布
明治33年 (1900)			未成年者喫煙禁止法公布(4月1日施行)			
明治34年 (1901)	山口県立農業学校	山口県立農業学校	山口県立農業学校	山口県農業学校を山口県立農業学校と改称	山陽本線全線開通	第1回ノーベル賞
明治35年 (1902)				私立山口県教育会設立	赤間関市を下関市と改称	八甲田雪中行軍遭難事件
明治36年 (1903)					山口県立山口図書館開館	ライト兄弟が人類初の動力飛行に成功
明治37年 (1904)						日露戦争始まる
明治38年 (1905)				山口高等学校を山口高等商業学校に改称 防長女子教育会の創立	山陽鉄道会社、下関~釜山間の連絡航路開始	日露戦争講和条約調印
明治40年 (1907)			小学校令改正。義務教育が6年間となる 南満州鉄道開業			
明治41年 (1908)	山口高等商業学校	山口県立農業学校	山口県立農業学校	山陽鉄道、国立鉄道となる 皇太子山口行啓 山口高商英語教師ガントレット、阿武川上流の峡谷美(長門峡)を世に紹介。夏	第2次桂内閣成立。外務寺内正毅	
明治42年 (1909)				専売局、三田尻製塩試験場を設置	伊藤博文、ハルピン駅で暗殺	
明治43年 (1910)				県立農業学校を小郡に移転	防府電灯・宇部電気・萩電灯会社を設立	韓国併合、朝鮮総督府設置
明治44年 (1911)					下関に秋田商会創立	西田幾多郎『善の研究』刊 帝国劇場開場(日本初の洋式劇場)
明治45年 (1912)				山口県教育会、私立防長教育博物館を設置		第5回オリンピック(ストックホルム)開催、 日本選手初参加 明治天皇崩御、大正と改元

参考資料

山口大学図書館所蔵

山口大学三十年史 / 山口大学30年史編集委員会編 山口大学,1982
山口高等商業学校沿革史 / 山口高等商業学校 [編],1940
花なき山の… / 鳳陽会編 2005
学友 山口高等中学校
植野の流れ / 毎日新聞山口支局編 山口大学教育学部同窓会,1983
奮発震動の象あり:防長教育史の人びと / 松野浩二著—山口:鳳陽会,2005
河内信朝先生小傳 作間鴻東編
防長教育会百年史 / 防長教育会編,1984
山口県教育史 / 山口県教育会編,1986
図説山口県の教育100年:学制発布100年記念 / 山口県教育委員会著 1972
山口縣文化史 / 山口県総務部学事広報課編,1959
山口県の教育史 / 小川國治,小川亜弥子共著,2000
山口県師範教育の遺産 / 村山英雄編著,1982
山口縣師範學校創立六十年史
山口県立山口農業高等学校百年史:開校百周年記念 / 山口県立山口農業高等学校百年史編纂委員会編著,1987
山口県の歴史 山口県 1967
山口市史 通史編 1955,
山口県植物誌 / 岡国夫ほか編 山口県植物誌刊行会,1972
昭和山口県人物誌 / 中西輝磨著,1990
写真集明治大正昭和山口 / 内田伸編 国書刊行会,1979
光地方歴史物語:光熊毛大和の今むかし / 原田一恵 [ほか] 著,1979
長州閩の教育戦略:近代日本の進学教育の黎明 — 九州大学出版会,2006
日本の弁護士 / 潮見俊隆編著,1972
河上肇:日本のマルクス主義者の肖像 / ゲイル・L. バーンスタイン著;清水靖久,千本秀樹,桂川光正訳,1991
自叙伝 / 河上肇 [著];杉原四郎,一海知義編 岩波書店,1996
経済人 / 日本経済新聞社編 9: 鮎川義介・松田恒次・北沢敬二郎・久保田豊・井上五郎・法華津孝太
鮎川義介伝:夢をひらく男 / 小沢親光著 山口新聞社,1974
直筆で読む「坊っちゃん」 / 夏目漱石著 集英社,2007
坊っちゃん / 夏目漱石作 岩波書店,2002
『坊っちゃん』とシュタイナー:隈本有尚とその時代 / 河西善治著 ぱる書店,2000
若き西田幾多郎先生:「善の研究」の成立前後 / 下村寅太郎著 1947
西田幾多郎:人間の生涯ということ / 上田閑照著 岩波書店,1995
明治高等教育制度史論 / 神立春樹著 お茶の水書房,2005
日本獣医学教育史 / 篠永紫門著 1972
旧制高等学校教育の成立 / 笈田知義著 1975
明治の教育 / 仲新著 1967
日本新教育百年史 / 小原國芳編 7:中国・四国 玉川大学出版部,1969
山口県地方史研究
日本の教育史学:教育史学会紀要 37号
西日本工業大学紀要 38巻
岡山大学経済学会雑誌 27巻1号
防長教育会沿革史抄 / 防長教育会 1980

山口県文書館所蔵

中小学章程 学諭
学制
山口県布達 明治7・8年



山口高等中学校時代の面影を残す石垣（現：パークロード）

創基 200 周年

山口大学の 来た道 2



200th
Anniversary
YAMAGUCHI UNIVERSITY

「志」つなぎ伝える
二百年

企画 山口大学図書館